高松市埋蔵文化財調査報告　第57集

都市計画道路東浜港花ノ宮線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書　第一冊

東　中　筋　遺　跡

－第１次調査－

２００１年１２月

高松市教育委員会

目　　次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　調査の経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1

第２章　地理的・歴史的環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2

第３章　調査の成果 …… 5
　第１節　調査区の位置 …… 5
　第２節　基本土層 …… 5
　第３節　遺構・遺物 …… 6
　　１）　弥生時代 …… 6
　　１　土坑 …… 6
　　２　柱穴 …… 10
　　２）　古墳時代 …… 11
　　１　溝 …… 11
　　３）　江戸時代 …… 13
　　１　掘立柱建物 …… 13
　　２　柱穴 …… 14
　　４）　その他 …… 14
　　１　噴砂 …… 14
　　２　旧河道 …… 14

第４章　自然科学的分析 …… 29
　第１節　東中筋遺跡の花粉化石 …… 29

第５章　調査のまとめ …… 36
　第１節　遺構の変遷 …… 36
　第２節　ＳＲ１出土の木製農耕具について …… 37
　第３節　焼夷弾について …… 37

例　　言

1　本報告書は，都市計画道路東浜港花ノ宮線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2　発掘調査地ならびに調査期間は，次のとおりである。
　　高松市桜町二丁目　　平成11年11月17日～平成12年1月31日
3　発掘調査および整理作業については，高松市教育委員会が実施し，文化部文化振興課文化財専門員　小川賢が担当し，中西克也（讃岐文化遺産研究会）が補佐した。
4　本報告書の執筆は，第1章第1節を小川，第1章第2節・第2章・第3章・第5章を中西が行い，編集は小川・中西が行った。
5　第4章の花粉分析は（株）パレオ・ラボに委託し，報告をいただいた。
6　本報告書掲載の遺物写真撮影は杉本和樹（西大寺フォト）に委託した。
7　出土遺物ならびに図面・写真類は，高松市教育委員会において保管している。
8　発掘調査および整理作業・本報告書刊行にあたって，下記の関係諸機関ならびに方々からご教示・ご指導をいただいた。
　　香川県教育委員会　　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
9　本報告書における表記および記述に関する凡例は，以下のとおりである。
（1）　遺構の略号は次のとおりである。
　　ＳＢ・・掘立柱建物　　ＳＤ・・溝　　ＳＫ・・土坑　　ＳＰ・・柱穴
　　ＳＲ・・旧河道
（2）　遺構番号は調査時に付けた番号を廃棄し，整理段階で新たに設定した。下の表は遺構番号を変更した遺構のみ表記する。

報告書の遺構番号	調査時の遺構番号
SK2	SP40
SK3	SP16
SK4	SK2
SD1	SD2
SD2	SD3
SD3	SD1
SB1	SP1，3～8
SP40	SP56
SP41	SP57

（3）　遺物観察表の表記方法は次のとおりである。
　　1　遺物の法量の中で（　）を付けているのは残存値である。
　　2　色調が内外面とも同じ場合には外面のみ表記する。
　　3　土器胎土の粒土表記の基準
　　微砂：非常に細かい　細砂：径0.5㎜以下　粗砂：径0.5～1㎜　細礫：径1㎜以上
（4）　遺物番号は通し番号とし，図版の遺物の数字は遺物番号である。
（5）　本報告書で用いる高度値は海抜であり，方位は座標北である。
（6）　本報告書の第2図「周辺主要遺跡分布図」の作成にあたり，国土地理院発行1／25,000地形図「高松南部」を使用した。
（7）　図の縮尺は次のとおりである。
　　遺構　遺構配置図：1／400　　ＳＢ：1／40　　ＳＤ：1／40，1／100
　　ＳＫ：1／20，1／40　　ＳＰ：1／20，1／40　　ＳＲ：1／80
　　噴砂：1／80
　　遺物　土器：1／2，1／4　　石器：1／2，1／4　　木製品：1／4

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

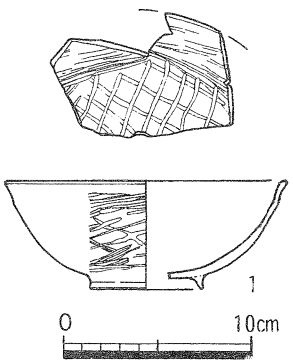
東中筋遺跡が所在する高松市桜町二丁目は，高松市北部に位置している。西に望む紫雲山の東麓には高松藩 12 万石が残した回遊式庭園があり，特別名勝栗林公園として高松随一の名所となっている。

遺跡の現況は水田であるが，周辺部は市立学校や病院のある閑静な住宅地であり，また北部では JR，私鉄駅や商業地等が広がり高松旧市街の南部に繋がる。近年では，高松を東西に横断する都市計画道路室町新田線の開通や移設してきた高松市保健センターを中心に市街化が一層進みつつある。

遺跡調査の契機となったのは，室町新田線から高松港の東部，東浜港へ南北に貫く都市計画道路東浜港花ノ宮線建設工事であり，工事が広範囲に及ぶため，事業の主管課である高松市都市開発部都市計画課の協力により事前の確認調査を実施した。

区間の北部となる既存の道路拡幅部分では，工事の工程に合わせて，随時確認調査を行ったが，第１図の瓦器椀や弥生土器等の土器片以外は明確な埋蔵文化財を確認できなかった。区間の南部，新規道路建設予定地内では，平成９年度および平成 11 年度に実施した確認調査から弥生時代を中心とした埋蔵文化財の存在が明らかとなり，都市計画課と協議の結果，平成 11 年度で 1,245 ㎡を，平成 12 年度で 700 ㎡を対象に本調査を行うこととなった。

本書（東中筋遺跡 第一冊）は，平成 11 年度に行った調査範囲について報告し，平成 12 年度の調査については，平成 14 年度に報告書（東中筋遺跡 第二冊）の刊行を予定している。



番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	瓦器 椀	15.0	6.0	5.7	内外面篦ミガキ・格子目状の暗紋	灰(7.5Y8/1		精良

第１図　試掘調査トレンチ出土遺物実測図　（Ｓ：1/4）

第２節　調査の経過

発掘調査は，平成 11 年 11 月 17 日から平成 12 年１月 31 日まで実施した。

調査は，最初に現水田耕作土・床土と２面の近世条里型水田耕作土を重機により全面掘削し，土層観察と排水のための側溝を全壁にわたって掘削した。その後，地山直上に薄く残っている近世条里型水田耕作土を人力掘削し，遺構検出作業を行った。その結果，調査区北側にピット群が検出され，南側に溝・土坑・柱穴・掘立柱建物・近代の粘土採掘跡の遺構が検出された。調査区の中央部分は旧河道である事が確認された。

検出時の遺構配置図と土層図の作成後に，12 月９日から南側の遺構の調査を開始した。まず，近代の粘土採掘跡を完掘し，ＳＤ１～３・ＳＫ１の調査を行った。ＳD1 の底面にＳＫ２が検出された。ＳＫ１～３は完形の土器が出土し，土層図･平面図を作成し，写真撮影を行った。ＳＤ１の平面図を作成後にＳＫ４の掘り下げを行った。柱穴を完掘し，調査区南側の調査を終えた。12 月 15 日からＳＲ１の掘り下げを開始し，１月 22 日に終了した。ＳＲ１の南岸では弥生土器･土師器･須恵器の土器が多量に出土したため，土層毎に掘削し遺物の取り上げを行った。河床では縄紋時代晩期～弥生時代前期の土器と木製品が出土した。１月 19 日に北岸斜面で焼夷弾の一部が出土した。１月 22 日に調査区北西部に検出した遺構の調査を終えた。24～26 日は雨のため調査は中止となった。27･28 日に航空写真測量の準備を行い，29 日は航空写真測量の後に個々の遺構の写真撮影を行った。31 日にＳＲ１の土壌サンプルを取り，調査を終了した。

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に，低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地，東側が立石山山地によって取り囲まれた東西 20 km，南北 16 kmの範囲に及んでいる。いずれの山地も花崗岩の上に緻密で侵食を受けにくい安山岩がキャップロックと呼ばれる形でかぶさっており，そのため平野周囲の山塊のように侵食解析から取り残された台状の平坦面を有する山地（メサ），あるいは，平野内部に見られる由良山等の孤立丘（ビュート）となっており，高松平野の自然環境を特徴付けている。

高松平野は，完新世に入ってから形成されたものである。讃岐山脈から流下し，瀬戸内海へ注ぐ香東川をはじめ，本津川，春日川，新川などによって搬出された堆積物により緩やかな傾斜の扇状地を形成している。現在石清尾山塊の西を直線に北流する香東川は，17 世紀に人工的に固定されたもので，それ以前には石清尾山塊の南側を回り込んで平野中央部を東北流する流路も存在していた。この旧流路は，現在では水田および市街地の地下に埋没してしまっているが，空中写真等から，林町から木太町へかけての分ヶ池，下池，長池，大池，ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており，発掘調査によってもその痕跡が確認されている。

本遺跡が所在する高松市街の中心に近づくにしたがい，傾斜が緩やかになっており，ここには海岸に沿って東西に延びる微高地の砂堆が形成されており，海の影響を受けていたと考えられる。ボーリングデータによれば，栗林公園付近から松縄町，久米池より北側では海成層の存在が確認される。高松市街付近では，現地表面下 10～12m 以浅が最終氷期末以降の堆積物であると推定できる。本遺跡に東隣する桜町中学校でのボーリングデータでは，現地表面下３ｍまではシルト質砂，３～７ｍは粘土，７～８ｍはシルト質砂，８ｍ以下は礫となっている。この現地表面下８ｍが沖積層と洪積層の境であり，これより上が最終氷期末以降の堆積物である。

第２節　歴史的環境

東中筋遺跡が所在する高松平野では，近年の大規模開発に伴う発掘調査によって多くの遺跡が調査され，少しずつではあるが遺跡の状況がわかってきた地域である。おおまかではあるが，各時代を追って遺跡の状況を見ていきたい。

高松平野で最古の遺跡は旧石器時代にさかのぼる。平野西南部の中間西井坪遺跡ではＡＴ火山灰層上層からナイフ形石器が出土している。このほか，香西南西打遺跡や雨山南遺跡，久米池南遺跡などの平野縁辺での出土が目立ち，平野中央部では今のところ知られていない。

縄紋時代では，大池遺跡で草創期と見られる有舌尖頭器２点の表採が報告されている。中期では，井手東Ｉ遺跡においてアカホヤ火山灰の堆積層が確認されており，高松平野の形成過程をうかがうことができる。晩期になると旧河道出土遺物であるが，林・坊城遺跡，居石遺跡等で土器や木製品の出土が知られている。

弥生時代になると遺跡数は飛躍的に増加する。前期の環濠集落として知られる天満・宮西遺跡，中期ではさこ・長池遺跡，さこ・長池Ⅱ遺跡が見られる。後期では十数棟の住居跡と大量の廃棄土器を伴う天満・宮西遺跡があげられる。これら集落遺跡の他に，さこ・長池遺跡，さこ・長池Ⅱ遺跡，弘福寺領田図北地区比定内遺跡では小区画水田を検出している。

古墳時代では，弥生終末期から続く上天神遺跡，凹原遺跡，空港跡地遺跡で初頭の集落，太田下・須川遺跡では中期の集落を検出している。生産関連の遺跡としてはさこ・松ノ木遺跡の水田，三谷三郎池の須恵窯跡，中間西井坪遺跡の土師質陶棺焼成土坑が知られるが，古墳時代全般を通じて集落は

希薄である。一方古墳は，ほぼ古墳時代全期間を通じて地域単位で断続的に展開している。その中心的存在である石清尾山塊古墳群は頂上部の尾根筋を中心とした前期の積石塚の築造が途絶えて100年以上の断絶を経た後，盛り土の群集墳が爆発的に盛行する。積石塚は，２基の双方中円墳と９基の前方後円墳で構成される。鶴尾神社４号墳は発生期の古墳として著名であり，群中最大の猫塚古墳は双方中円墳という特異な墳形であり，複数の埋葬施設を有する。石船塚古墳は後円部中央に刳抜式石棺を有する。

古代では条里遺構と古代寺院跡が注目される。中でも松縄下所遺跡は地表条里と同方向の道路状遺構を検出し，時期も７世紀代までさかのぼり得るなど，高松平野の条里施行に関わる可能性がある重要な遺跡である。また，日本最古の荘園田図として名高い「弘福寺領讃岐国山田郡田図」の北地区比定地が大池周辺に存在する。やや位置的に外れるが，この田図と同時期の井戸が発見された遺跡として木太本村Ⅱ遺跡があげられる。古代寺院跡では宝寿寺跡，山下廃寺，下司廃寺，高野廃寺，拝師廃寺，坂田廃寺，多肥廃寺，勝賀廃寺などが知られている。

中世では，城館が多数知られている。東中筋遺跡の東側の木太町には神内氏の神内城が存在する。木太南小学校の校庭が比定地であり，調査の結果15～16世紀の遺物を包含する幅2.6mの溝が確認されている。神内城の東側，白山神社古墳を挟んで土塁状の遺構が残る真鍋氏の向城が知られている。神内氏は十河氏方，真鍋氏は香西氏方の部将で，数百メートルしか離れていないところに城を築いていることが特徴的である。松縄町の天満・宮西遺跡に東隣して松縄城が存在している。また，伏石町のキモンド一遺跡においては，佐藤氏の佐藤城の堀を検出している。さらに目を西に転じれば，西ハゼ町の西ハゼ土居遺跡では，堀や塀を巡らした屋敷が３棟検出された。最大の屋敷は約44㎡，中規模のもので約33㎡，小規模のもので約22㎡と推定される。最大の屋敷地の堀から日用雑器に加え瓦や青磁が出土した。

近世では，東山崎・水田遺跡，川南・東遺跡，川南・西遺跡において，春日川の氾濫による洪水砂層上に営まれた集落跡が検出されている。また，近世は大規模な土木工事の時代でもあった。特に西嶋八兵衛による香東川の付け替えとこれに関連して木太町周辺の干拓と新田開発が注目できる。後に松平頼重によりさらに北側の干拓が行われ，ほぼ現在の海岸線となった。しかしながら低地であることから，1710年，1722年，1866年の大風雨において春日川や新川の決壊が起こり，多大な被害が記録されている。現高松市美術館の紺屋町遺跡では陶磁器や木簡が出土し，高松城東ノ丸跡や地久櫓台，三ノ丸跡，サンポート高松整備に伴う埋蔵文化財発掘調査において石垣や建物礎石などの遺構が検出され，往時の城下町の姿が次第に明らかになってきている。

参考文献

秋山 忠 1982 『古城跡を訪ねて』 高松市歴史民俗協会
高松市教育委員会 1992 『讃岐国弘福寺領の調査』
香川県教育委員会 1992～96『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告 第1～6冊』
高松市教育委員会 1993～95 『一般国道高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1～7冊』
濱田重人 1993 「高松市木太町大池遺跡表採の有舌尖頭器」『香川考古 第2号』香川考古刊行会
香川考古刊行会 1994 『香川考古 第3号 特集：香川の中期古墳』
高松市教育委員会 1996 『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ』
香川県教育委員会 1998 『宮川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 木太本村Ⅱ遺跡』
高松市教育委員会 1998～2001 『太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1～4冊』
高松市教育委員会 1999～2000 『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書 第1～2冊』

1．東中筋遺跡　2．稲荷山姫塚　3．西ハゼ土居遺跡　4．松並・中所遺跡
5．キモンドー遺跡　6．天満・宮西遺跡　7．松縄下所遺跡　8．境目・下西原遺跡
9．上西原遺跡　10．弘福寺領田図比定地　11．大池遺跡　12．上天神遺跡
13．太田下・須川遺跡　14．蛙股遺跡　15．居石遺跡　16．井手東Ⅱ遺跡
17．井手東Ⅰ遺跡　18．さこ・長池Ⅱ遺跡　19．さこ・長池遺跡　20．汲仏遺跡

第２図　周辺主要遺跡分布図（Ｓ：1/25,000）

第３章　調査の成果

第１節　調査区の位置

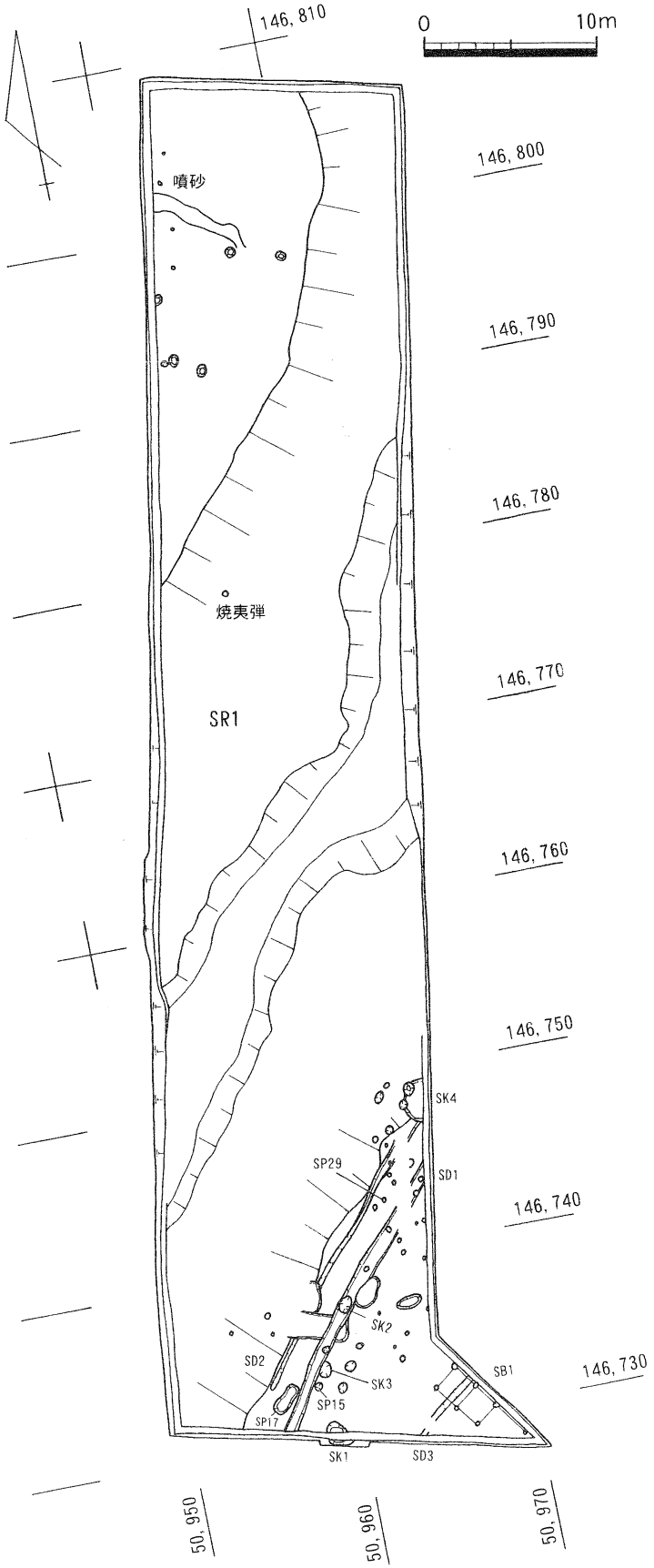
東中筋遺跡が位置する桜町二丁目は市街化の著しい区域であるが，その中に水田がわずかに営まれている。東中筋遺跡は，都市計画道路室町新田線と高松琴平電気鉄道琴平線が交差する踏み切りを東へ50m行った水田に所在し，北東側には桜町中学校と高松第一高等学校がある。さらに，約250m東には御坊川が北東方向に流れている。遺跡周辺の水田の標高は6.60mであり，南から北に向かって緩やかに低くなっている。

調査区は道路建設に伴う発掘調査であるため南北方向に細長く設定され，南端は都市計画道路室町新田線と接する。全長は79m，幅は16mを測る。調査区の南端部は交差点になるため幅が30mになり，東側と西側に調査区が三角形に拡張するが，西側は搬入道を確保する必要から未調査部分となっている。

第２節　基本土層

旧河道を除く微高地の土層堆積は次のとおりである。最上位は現水田耕作土であり，厚さは約20㎝である。その下には1面ないし2面の近世条里型水田耕作土の淡黄色シルト質極細砂が堆積し，その下は遺構確認面の地山となる。調査区の南東部ではこの層が堆積しておらず，現水田耕作土の直下は地山となる。

旧河道の土層堆積は，第3節で詳細に述べるが，埋没後の凹地に土層の堆積が多く見られ，水田の耕作土が検出されている。



第３図　遺構配置図（S：1/400）

第３節　遺構・遺物

１）　弥生時代

１　土坑

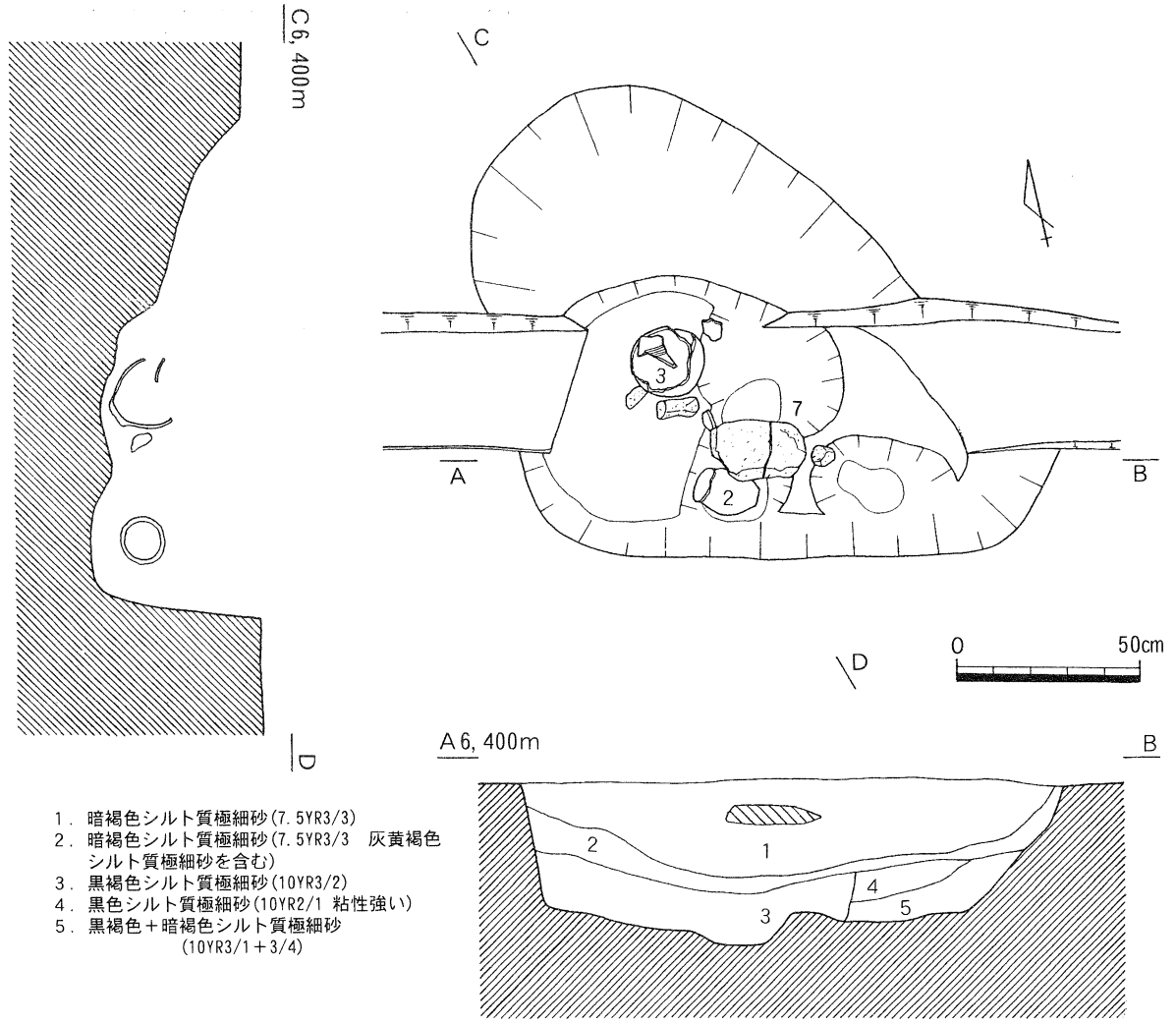
ＳＫ１　（第４・５図）

調査区南端中央において単独で検出された土坑であり，中央部は側溝の掘削により一部消滅する。

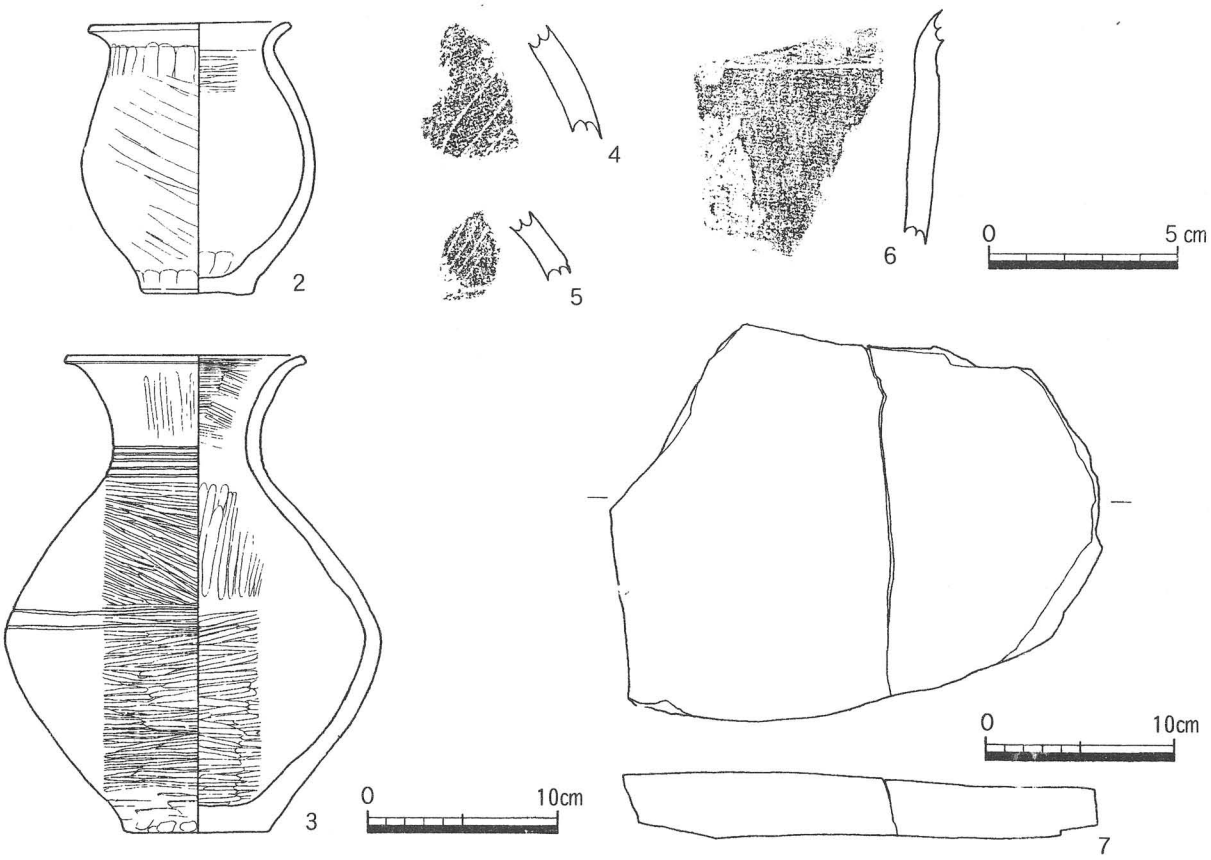
検出面のレベルは標高6.34mである。土坑の平面形は南側が直線をなす不整な楕円形を呈する。南北方向の長軸は1.30m，東西方向の短軸は1.16mを測る。確認面からの深さは最深部で0.44mである。北半部の掘り込みは緩やかな傾斜であるが，南側は非常に急傾斜でありほぼ垂直に掘り込まれている。底面も不整な楕円形を呈し，中央部にわずかな落ち込みがある。埋土は５層に分層されるが，１・２層と３～５層に大別される。その堆積はレンズ状堆積である。

遺物は，弥生土器壷（２～５），同甕（６），石製品（７），その他の弥生土器片である。土器の時期は弥生時代前期であると考えられる。

２は小型の壷でほぼ完形であり，口縁部は短く外反する。口縁部は横ナデ・横方向のヘラナデが施され，胴部外面下半に楕円形の黒斑がある。３はほぼ完形の広口壷で，頸部外面に５条の箆描沈線，胴部外面中央に２条の箆描沈線が廻っている。胴部外面と口縁部内面，胴部内面下半はヘラミガキ，口縁部外面はナデ，胴部内面上位は指ナデが施される。４・５は胴部上位の破片で，木葉紋がある。６は胴部上位片であり，外面に沈線を有する。



第４図　ＳＫ１平・断面図（Ｓ：1/20）



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
2	弥生土器 壷	10.2	5.6	14.4	外面篦ケズリ・ナデ・篦ナデ 内面篦ナデ・ナデ	灰黄 2.5Y7/2		細砂
3	弥生土器 壷	12.4	7.6	25.1	外面篦ミガキ・篦描沈線紋 内面篦ミガキ・指ナデ	鈍い黄橙10YR6/3	鈍い黄橙 10YR7/3	粗砂～細礫
4	弥生土器 壷			(3.0)	外面篦ミガキ・木葉紋 内面ナデ	鈍い黄橙10YR6/3	鈍い黄橙 10YR7/2	石英・長石・角閃石
5	弥生土器 壷			(1.8)	外面ナデ・木葉紋 内面ナデ	鈍い黄橙7.5YR7/3	浅黄 2.5Y7/3	石英・長石・角閃石
6	弥生土器 甕			(5.9)	外面篦ミガキ・沈線 内面指頭圧痕	淡黄 2.5Y8/3		石英・金雲母

番号	器種	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
7	石材	25.8	20.7	3.4	3125.0	砂岩	片面は滑らかである

第５図　ＳＫ１出土遺物実測図（Ｓ：1/2, 1/4）

ＳＫ２　（第６・７図）

調査区南側において検出された土坑であり，上面はＳＤ１によって削平されている。

この土坑はＳＤ１完掘後に検出されたため，確認面のレベルは標高6.15ｍである。現存する平面形は楕円形を呈し，その規模は，南北方向の長軸で1.02ｍ，東西方向の短軸で0.59ｍを測る。確認面からの深さは0.14ｍである。掘り込みは非常に緩やかであり，底面との境は不明瞭である。底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色と暗褐色シルト質極細砂の単一層である。

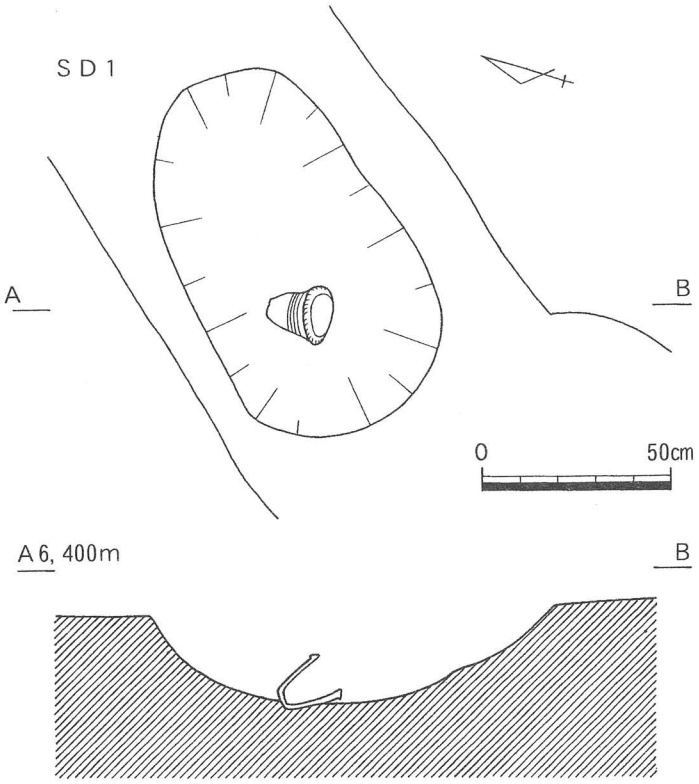
遺物は，弥生土器甕（８），その他の弥生土器片数点である。土器の時期は弥生時代前期である。

８は完形の小型甕であり，土坑の南寄りの底部直上より出土した。口縁部の直径は14.2×12.7㎝，底径は5.9×5.1㎝，器高13.5～14.2㎝を測り，左右非対称の形態をなす。口縁部は逆Ｌ字状口縁をなし，胴部外面上位に４条の篦描沈線を巡らす。沈線は螺旋状に描かれており，土器の正面位に沈線の接点が見られる。口縁端部外面に刻目が施される。胴部外面は縦方向の刷毛目，内面は篦ナデが施される。底部周縁部はナデが施されるが，中央部は未調整である。

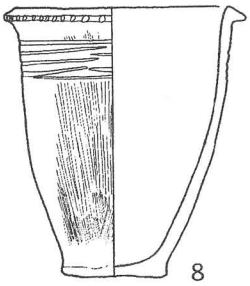
ＳＫ３　（第８・９図）

調査区南側において検出された土坑であり，ＳＤ１に土坑の北西部分は切られている。

確認面のレベルは標高6.31ｍである。平面形はやや不整な楕円形を呈し，その規模は，南北方向の



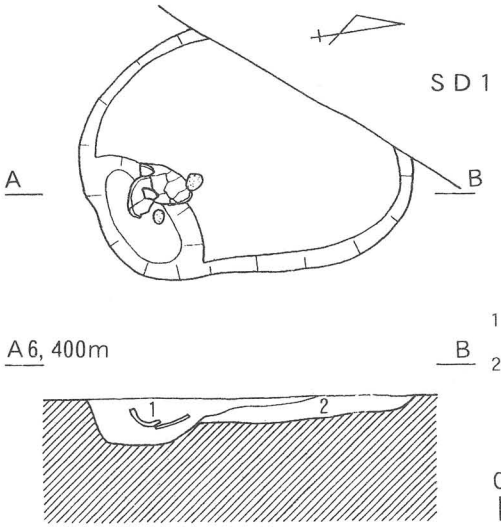
第６図　ＳＫ２平・断面図（Ｓ：1/20）



0　10cm

番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
8	弥生土器　甕	11.4	5.9	14.2	外面刷毛目・篦描沈線4条　口縁端部に刻目紋	淡黄　2.5Y8/3	灰白　2.5Y8/2	石英・長石・角閃石

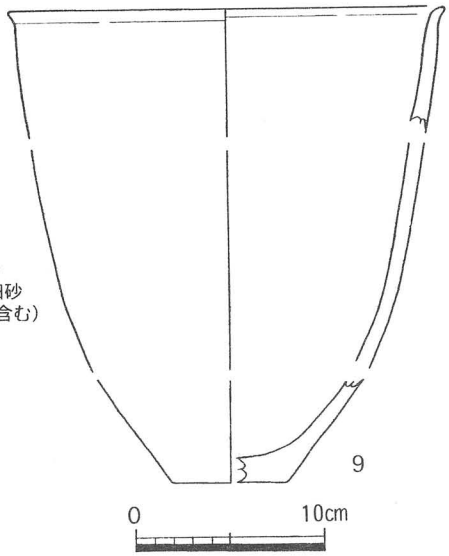
第７図　ＳＫ２出土遺物実測図　（Ｓ：1/4）



1．暗褐色シルト質極細砂
　(10YR3/3　2層を若干含む)
2．にぶい黄褐色シルト質極細砂
　(10YR5/3　灰白色土を若干含む)

0　50cm

第８図　ＳＫ３平・断面図（Ｓ：1/20）



0　10cm

番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
9	弥生土器　甕	23.0	6.0	(25.0)	内外面ナデ　外面一部篦ミガキ	鈍い褐　7.5YR6/3	鈍い黄橙　10YR7/3	石英・細砂～細礫

第９図　ＳＫ３出土遺物実測図　（Ｓ：1/4）

長軸で0.88m，東西方向の短軸で0.65mを測る。確認面からの深さは0.07mを測り，底面はほぼ平坦である。底面の南端部に楕円形の落ち込みがあり，最深部の深さは0.13mを測る。掘り込みは緩やかであり，断面は逆台形を呈する。埋土は暗褐色シルト質極細砂とにぶい黄褐色シルト質極細砂であり，前者が南端部の落ち込みに充填されている。

遺物は，弥生土器甕（9），その他の弥生土器数点である。土器の時期は弥生時代前期末である。

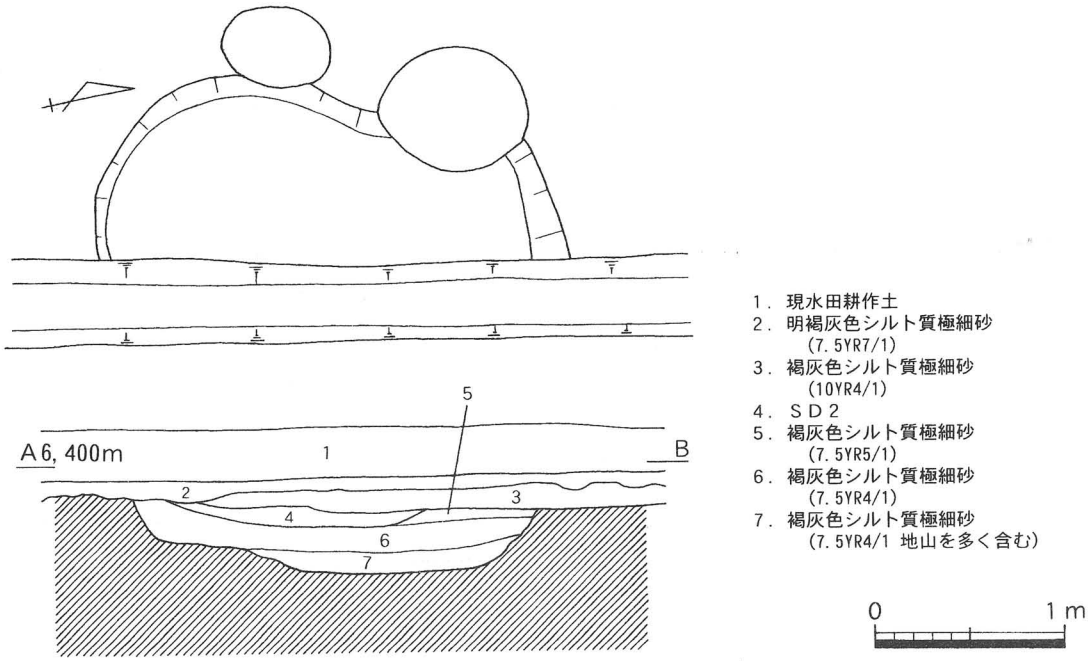
9は土坑の南端部の埋土中位より出土した甕であり，胴部の中央部分を欠損する。推定の器高は25cmである。口縁部はわずかに外反し，いわゆる「如意状」口縁であり，胴部は無紋である。

ＳＫ４　（第10・11図）

調査区の南側で検出された土坑であり，ＳＲ１の南岸を掘り込み，ＳＤ２と２個のピットに切られている。土坑の東側は調査区外に延びている。

確認面のレベルは標高6.17mである。検出された範囲の平面形は不整な楕円形を呈し，南北方向の長軸は2.45m，東西方向の残存長は0.98mを測り，確認面からの深さは最深部で0.40mである。掘り込みは急傾斜であるが，北側は若干傾斜が緩やかになっている。底部は中央より北側が深くなっており，その比高差は0.26mである。埋土はわずかに色調の異なる３層の褐灰色シルト質極細砂であり自然堆積を呈する。

遺物は，弥生土器甕（10・11），同壷（12），その他の弥生土器片である。土器の時期は弥生時代前期である。



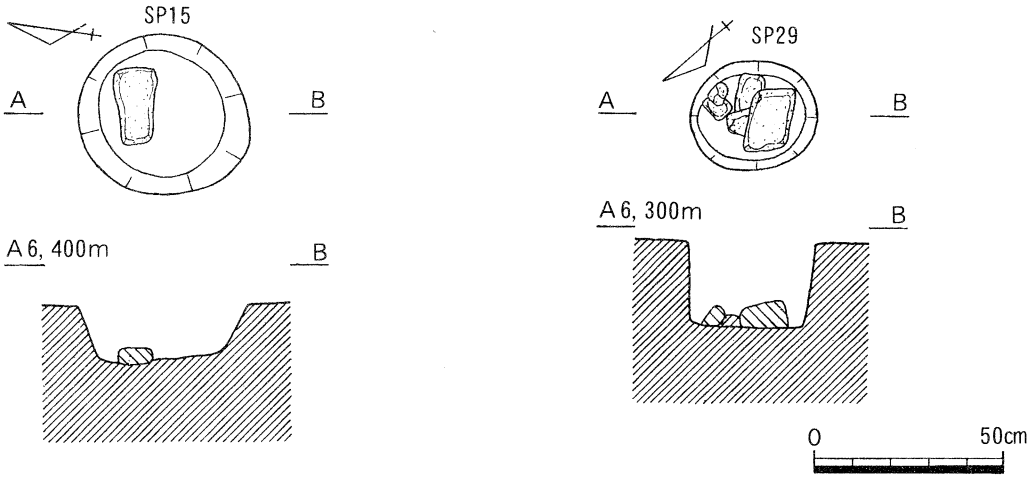
第10図　ＳＫ４平・断面図（Ｓ：1/40）

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
10	弥生土器 甕		9.0	(7.3)	内外面摩滅	鈍い橙 7.5YR7/2	灰黄褐10YR6/2	細砂多量
11	弥生土器 甕			(2.7)	内外面ナデ　外面沈線紋	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い黄橙 10YR7/3	石英・長石多量
12	弥生土器 壷			(2.2)	外面ナデ・篦ミガキ・沈線紋　内面ナデ	鈍い橙 7.5YR6/3	鈍い黄橙 10YR6/3	石英・長石多量

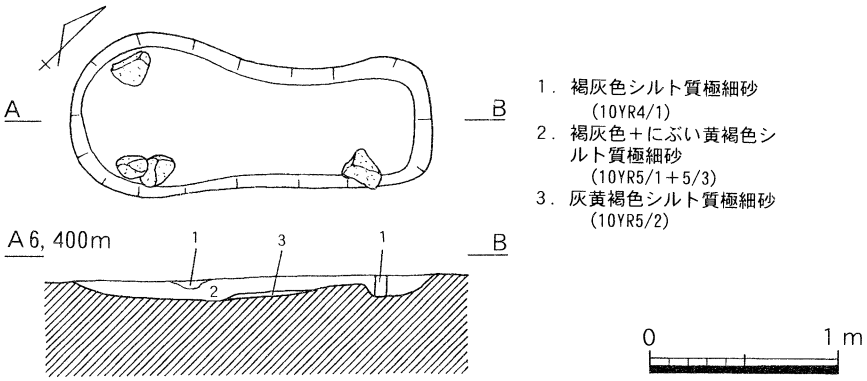
第11図　ＳＫ４出土遺物実測図　（Ｓ：1/2,1/4）

2　桂穴　（第12・13図）

遺構名	位置	平面形態	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	確認面の標高	埋　土	備　考	報告書
SP12	南側	円形	0.42		0.31	6.26	暗褐色シルト質極細砂		
SP13	南側	楕円形	0.62	0.54	0.05	6.26	暗褐色シルト質極細砂		
SP14	南側	不整円形	0.61	0.51	0.03	6.25	暗褐色シルト質極細砂		
SP15	南側	円形	0.41		0.15	6.29	暗褐色シルト質極細砂	底面に根石が残存	○
SP17	南端	不整楕円形	1.94	0.86	0.12	6.25	暗褐色シルト質極細砂	4個の川原石	○
SP22	南側	円形	0.45		0.32	6.16	暗褐色シルト質極細砂		
SP23	南側	円形	0.21		0.18	6.16	暗褐色シルト質極細砂		
SP24	南側	円形	0.26		0.33	6.29	暗褐色シルト質極細砂		
SP27	南側	円形	0.36		0.38	6.22	暗褐色シルト質極細砂		
SP28	南側	円形	0.36		0.21	6.23	暗褐色シルト質極細砂		
SP29	南側	円形	0.33		0.22	6.23	暗褐色シルト質極細砂	底面に根石が残存	○
SP33	南側	円形	0.37		0.02	6.11		SD1に削平される	
SP34	南側	楕円形	0.39	0.26	0.02	6.11		SD1に削平される	
SP35	南側	円形	0.34		0.11	6.09	暗褐色シルト質極細砂	SD1に削平される	
SP36	南側	円形	0.51		0.11	6.11	暗褐色シルト質極細砂		
SP37	南側	円形	0.32		0.19	6.22	暗褐色シルト質極細砂		
SP38	南側	円形	0.22		0.18	6.22	暗褐色シルト質極細砂		
SP39	南側	円形	0.19		0.15	6.21	暗褐色シルト質極細砂		
SP42	南側	不整円形	0.42		0.08	6.11	暗褐色シルト質極細砂		
SP43	南側	不整円形	0.47		0.29	6.15	暗褐色シルト質極細砂		
SP44	南側	楕円形	0.72	0.41	0.03	5.91			
SP45	北西側	円形	0.49		0.16	5.98	暗褐色シルト質極細砂		
SP46	北西側	不整円形	0.68	0.58	0.06	5.98	暗褐色シルト質極細砂		
SP48	北西側	不整円形	0.66		0.06	6.02	暗褐色シルト質極細砂		
SP49	北西側	円形	0.49		0.16	5.98	暗褐色シルト質極細砂		
SP50	北西側	円形	0.61		0.13	6.01	暗褐色シルト質極細砂		
SP55	南側	楕円形	0.38	0.28	0.06	5.92	暗褐色シルト質極細砂		
SP56	南側	不整円形	0.57		0.19	5.94	暗褐色シルト質極細砂		
SP57	南側	不整円形	0.77		0.29	5.88	暗褐色シルト質極細砂		
SP58	南側	円形	0.39		0.02	6.11			
SP59	南側	円形	0.48		0.12	6.07			
SP60	南側	楕円形	0.41	0.26	0.05	5.91			



第12図　ＳＰ15・29平・断面図（Ｓ：1/20）



第13図　ＳＰ17平・断面図（Ｓ：1/40）

2）　古墳時代

1　溝

ＳＤ１　（第14・15図）

調査区の南側において検出された溝であり，ＳＫ２・３，ＳＰ22・27・33～35を切っており，近代の瓦用の粘土採掘跡により上面を削平される。溝の北端には試掘トレンチが掘削されている。

検出面のレベルは標高 6.25m前後である。溝の方位はＮ－40°－Ｅを示し，ＳＤ２と平行して延びており，ＳＲ１の南岸ともほぼ同方向である。検出した全長は17.90m，幅は0.60～0.93mを測る。確認面からの深さは 0.07～0.15mである。溝の掘り込みは非常に緩やかであり，断面はU字形を呈する。底面のレベルは南から北に向かって緩やかに低くなっており，南端の標高は6.19m，北端では6.11mである。埋土は灰色シルト質極細砂の１層と灰色＋黄灰色シルト質極細砂の２層に分層されるが，２層は底面に薄く堆積するのみである。

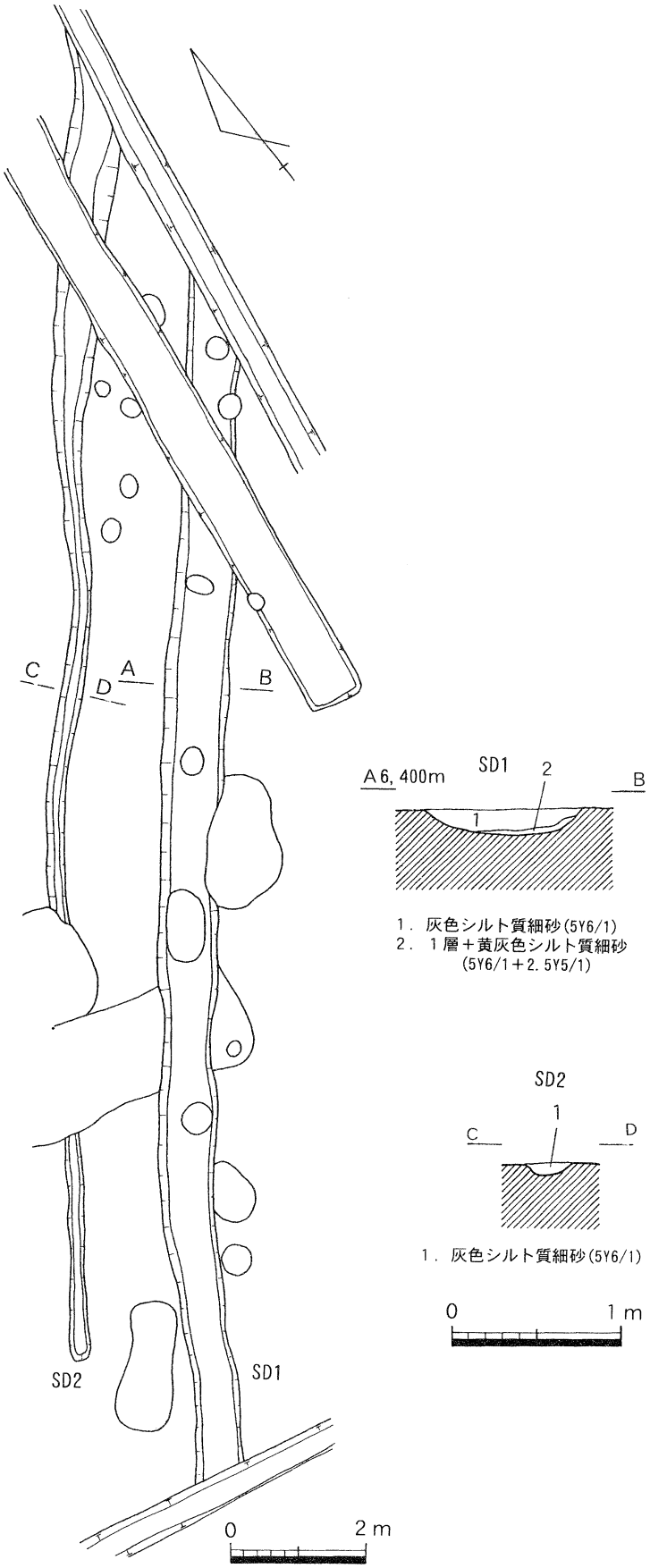
遺物は，土師器壷（13・14），須恵器杯身（15），同高杯（16），弥生土器甕（17）である。

13・14は壷の口縁部であり，内外面とも摩滅し調整は不明である。13は大きく外反し，口縁端部はやや角ばる。14は内面に段を持ち，口縁端部が若干尖る。

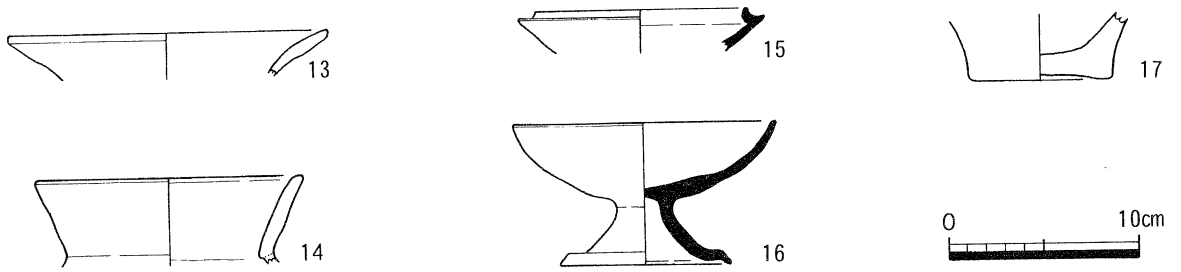
15は器高の低い杯身であり，斜めに延びる受部から内傾する短い口縁部が付いている。

16 は口径に対して器高の低い高杯であり，杯部は浅い半球形を呈し，口縁端部はやや尖る。脚部は短く大きく広がり，脚裾部は明瞭な段を持ち立ち上がる。15・16はその器形の特徴から7世紀初頭のものと考えられる。

17は弥生土器の甕底部であり，混入したものである。底部は若干上げ底である。内外面とも摩滅しているが，内面に部分的にナデが残存する。

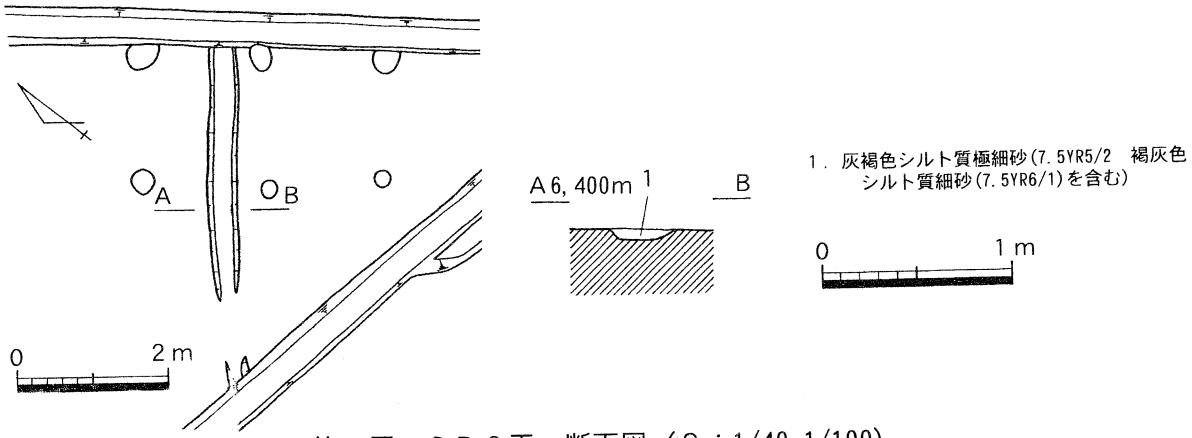


第14図　ＳＤ１・２平・断面図（Ｓ：1/40, 1/100）



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
13	土師器 壷	16.8		(2.4)	口縁端部は角張る 内外面摩滅	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い黄橙 10YR6/4	微～細砂
14	土師器 壷	14.0		(4.6)	口縁端部はやや尖る 内外面摩滅 接合痕	灰白 10YR8/2	鈍い黄橙 10YR7/3	微～細砂
15	須恵器 杯身	11.0		(2.3)	回転ナデ	灰白 N7/		精選
16	須恵器 高杯	13.8	9.0	7.4	回転ナデ 脚部は段を有す	灰白 N8/		精選
17	弥生土器 甕		7.4	(3.5)	外面摩滅 内面摩滅するが一部にナデ	灰黄褐 10YR6/2	鈍い黄橙 10YR7/4	石英・長石多量

第15図　ＳＤ２出土遺物実測図　（Ｓ：1/4）



第16図　ＳＤ３平・断面図（Ｓ：1/40, 1/100）

ＳＤ２　（第14図）

調査区の南側においてＳＤ１の西側で検出された溝であり，ＳＫ４とＳＲ１の南岸を切っており，近代の瓦用の粘土採掘跡により上面を削平される。溝の北端には試掘トレンチが掘削されている。

検出面のレベルは標高 6.25m前後である。溝の方位はＮ－40°－Ｅを示し，ＳＤ１と平行して延びており，ＳＲ１の南岸ともほぼ同方向である。ＳＤ１とＳＤ２の距離は芯芯間で1.75～2.00mを測る。検出した全長は18.70m，幅は0.20～0.90mを測り，南側になるにしたがい幅は広くなっている。確認面からの深さは 0.02～0.10mである。溝の掘り込みは非常に緩やかであり，断面はU字形を呈する。底面のレベルは南から北に向かって緩やかに低くなっており，南端の標高は6.21m，北端では6.09mであり，その比高差は0.12mである。溝北側の底面直上から拳大の石が数個検出された。埋土は灰色シルト質極細砂の単一層である。

遺物の出土は非常に少なく，数点の土師器片・須恵器片のみであり，図化できるものはなかった。

ＳＤ３　（第16図）

調査区の南東側において検出された溝である。

検出面のレベルは標高6.24m前後である。溝の方位はＮ－50°－Ｅを示し，溝の南側は長さ0.80mが後世の削平を受けているが，検出できた全長は 4.40m，幅は 0.40mを測る。確認面からの深さは0.07mである。溝の 断面はU字形を呈する。底面のレベルは南から北に向かって緩やかに低くなっており，南端の標高は6.19m，北端では6.17mである。埋土は灰褐色シルト質極細砂である。

遺物の出土は非常に少なく，数点の土師器片・須恵器片のみであり，図化できるものはなかった。

3）　江戸時代

1　掘立柱建物

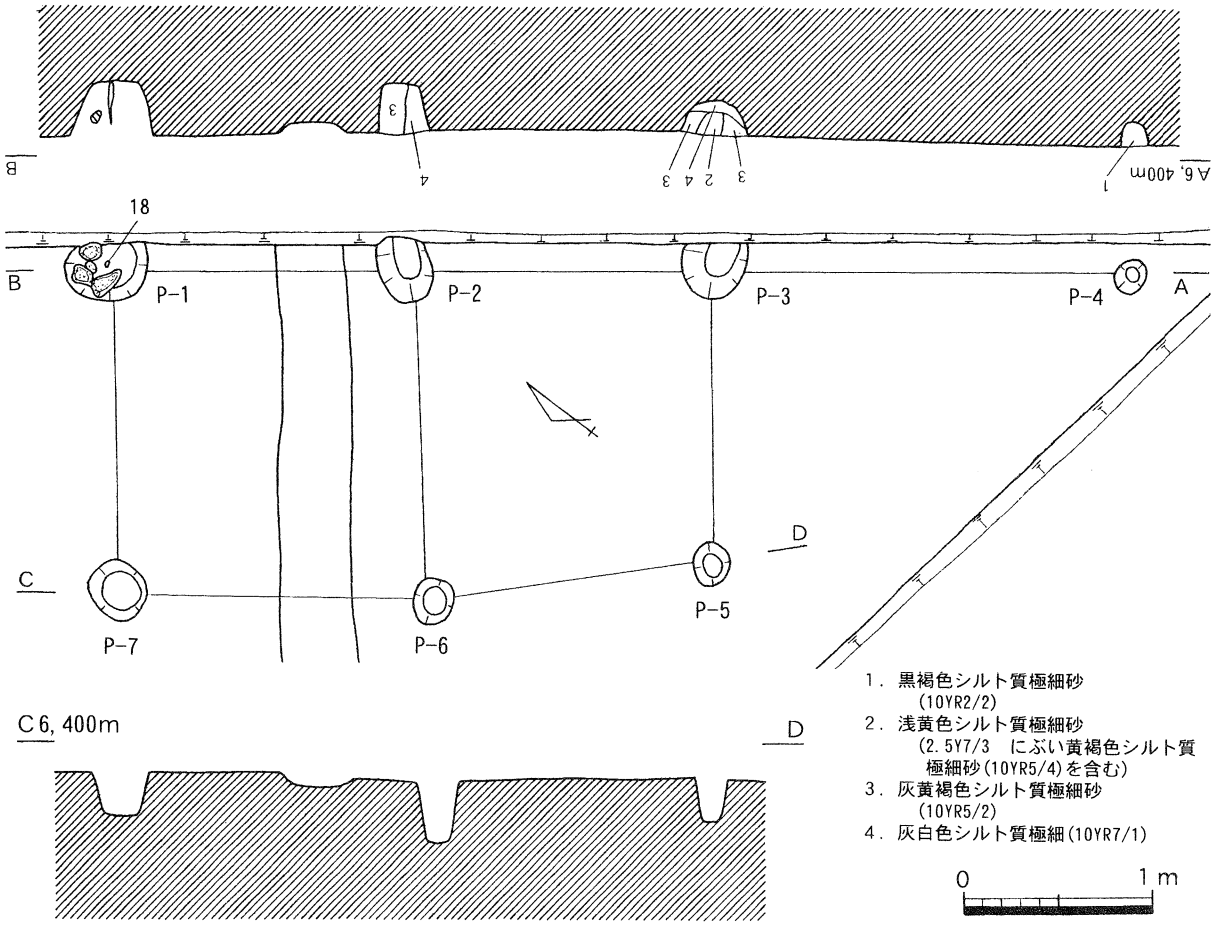
ＳＢ１　（第17・18図）

調査区の南東隅において検出された掘立柱建物であり，北側と東側の調査区外に建物は広がる。

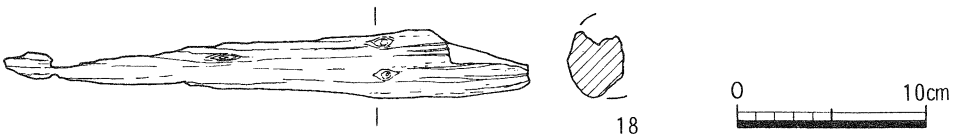
確認面のレベルは標高6.20～6.26mである。検出できたのは，南側列柱の柱穴３個とその北側の４個の柱穴だけであり，建物全体の平面形や規模は不明であるが，柱穴の位置から総柱建物であると考えられる。南側列柱の方位はＮ－37°－Ｗを示す。検出された南北長は2.00m，東西長は5.74mを測る。柱穴間の芯芯距離は1.70mである。柱穴の平面形は，Ｐ－２・３の楕円形を除き円形を呈し，その直径は0.18～0.40mである。深さは0.09～0.33mを測る。Ｐ－１は中心に柱材の一部が直立し，その周囲には４個の詰石が残存する。埋土は４層に分けることができる。

遺物は，柱材（18）と数点の土師質土器片のみであり，図化することのできる土器片はなかった。

18は，現存長27.7cmを測り，遺存状態は非常に悪い。明瞭な加工痕は見られなかった。



第17図　ＳＢ１平・断面図（Ｓ：1/40）



番号	器　種	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
18	柱材	(27.7)	(2.9)				

第18図　ＳＢ１出土遺物実測図　（Ｓ：1/4）

2　柱穴

ＳＰ２

調査区の南東隅において検出されたピットである。確認面のレベルは標高6.23mである。平面形は円形を呈し，直径は0.14m，深さは0.10mを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂である。

ＳＰ９～11・18～20・25・26

調査区の南側中央で検出されたピットで，確認面のレベルは標高6.20～6.25mである。平面形は円形を呈し，直径は0.15～0.42m，深さ0.02～0.14mを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂である。

ＳＰ30・40・41

調査区の南西側で検出されたピットである。確認面のレベルは標高6.25mである。平面形は円形を呈し，直径は0.18～0.35m，深さは0.15～0.42mを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂である。

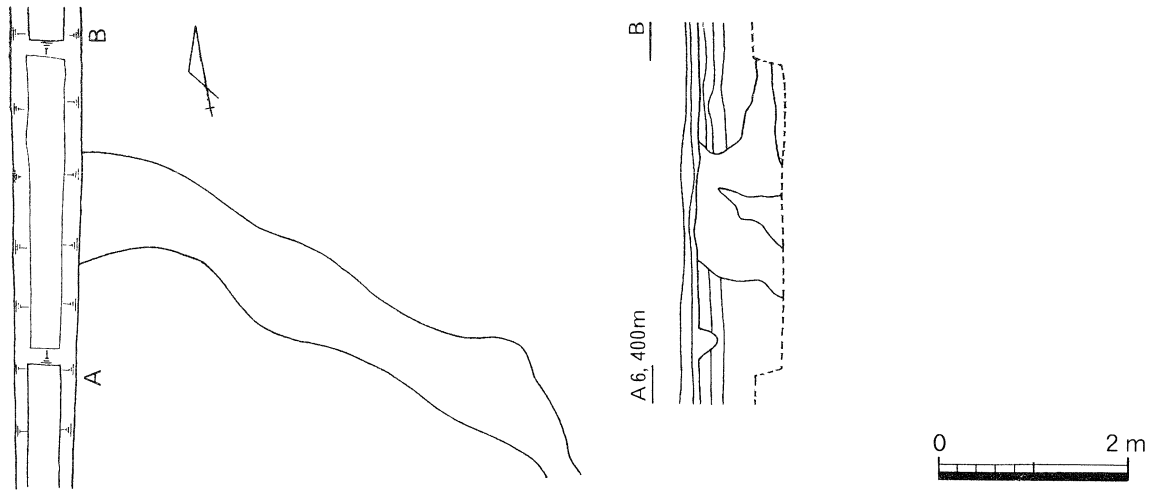
ＳＰ51～54

調査区の北西側で検出されたピットで，確認面のレベルは標高6.00m前後である。平面形は円形を呈し，直径は0.12～0.25m，深さは0.08～0.17mを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂である。

4）　その他

1　噴砂　（第19図）

調査区の北西側において検出された噴砂である。確認面のレベルは標高6.00m前後である。平面形は不整な帯状を呈し，全長は約6.00m，幅は0.70～1.20mを測る。土層断面の観察によれば，確認面より0.90m以上深い所から砂が噴き上がっている。噴砂は遺構と切り合っていないので，その時期は不明であるが，噴砂の上面に江戸時代の水田耕作土が堆積していることより，噴砂は江戸時代以前に発生した大地震に伴ったものと考えられる。



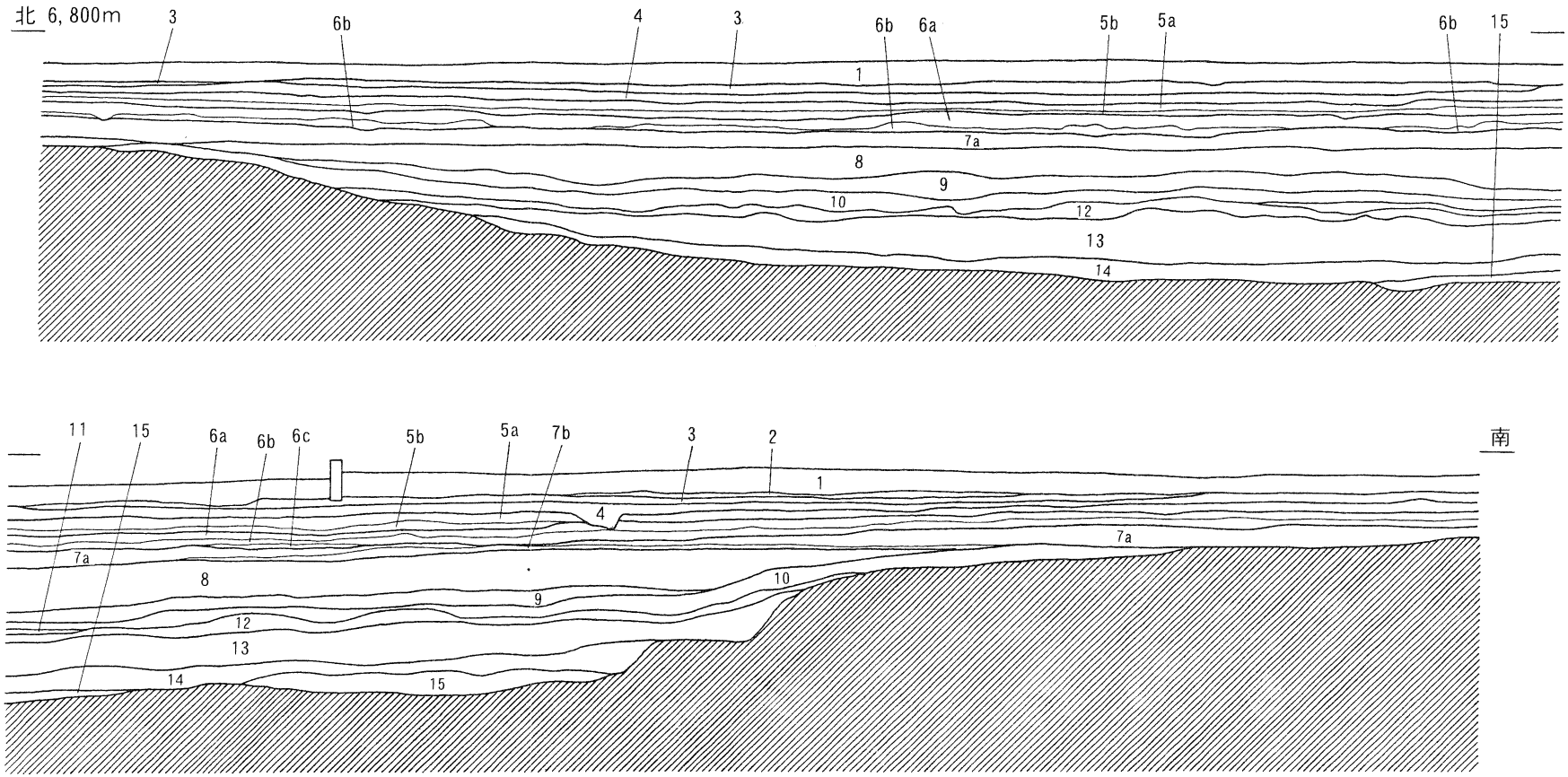
第19図　噴砂平・断面図（Ｓ：1/80）

2　旧河道

ＳＲ１　（第20～32図）

調査区中央において検出された旧河道である。

確認面のレベルは北岸で標高 5.92～6.00m，南岸で標高 6.19～6.26mである。旧河道は調査区中央を南西－北東方向に横断しており，その方位はＮ－40°－Ｅを示す。南岸はほぼ直線的に延びてい



近世
1. 現水田耕作土
2. 淡黄色シルト質極細砂(2.5Y8/3　下層にFeを含む)
3. 淡黄色シルト質極細砂(2.5Y8/3　下層にFeを含む)
4. 淡黄色シルト質極細砂(2.5Y8/3　下層にFeを含む)

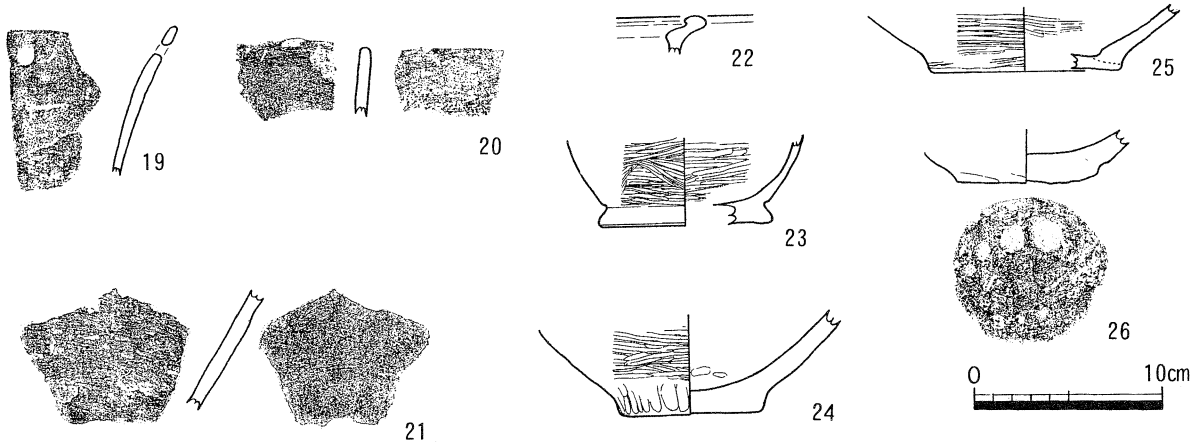
中世
5 a 明褐灰色シルト質極細砂(7.5YR7/1　Soil)
b 明褐灰色シルト質極細砂(7.5YR7/1　Feを含む)

古代
6 a 褐灰色シルト質極細砂(10YR4/1　Soil)
b にぶい黄色シルト質極細砂(2.5Y6/3　Feを含む)
c 灰白色細砂(2.5Y8/1)
7 a 灰褐色シルト質極細砂(7.5YR4/2)
b 灰褐色シルト質極細砂(7.5YR5/2　Feを多量に含む)

縄紋～弥生
8. 褐灰色シルト質極細砂(7.5YR4/1)
9. 褐灰色シルト質極細砂(10YR4/1)
10. 黒褐色シルト質極細砂(10YR3/1)
11. 黒褐色シルト質極細砂(10YR3/1　灰色を呈す)
12. 灰白色シルト(10YR8/1＋8/2　ラミナ状堆積)
13 灰黄褐色シルト質極細砂(10YR4/2　ラミナ状堆積，植遺体を含む)
14. 灰黄褐色シルト質極細砂(10YR5/2　ラミナ状堆積，白色細砂を含む)
15. 砂礫層

0　2 m

第20図　ＳＲ１土　層　図（Ｓ：1/80）



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
19	縄紋土器 深鉢			(7.9)	外面篦ミガキ 孔1個	褐灰 10YR6/1	褐灰 10YR5/1	細～粗砂多量
20	縄紋土器 深鉢			(3.7)	外面篦ミガキ 内面篦ケズリ 口縁端部に押圧	灰黄褐 10YR6/2		微～細砂
21	縄紋土器 深鉢			(6.2)	内外面篦ミガキ	暗灰黄 2.5Y5/2	黒 2.5Y2/1	粗砂～細礫
22	縄紋土器 浅鉢	32.0		(2.1)	外面篦ミガキ 内面篦ミガキ・ナデ	黄灰 2.5Y5/1		細砂
23	縄紋土器 浅鉢		9.2	(4.6)	内外面篦ミガキ 底面ナデ	黒 10YR2/1	黒褐 10YR3/1	細砂～細礫
24	縄紋土器 深鉢		7.5	(5.3)	外面篦ミガキ・ナデ 内面篦ナデ 底面未調整	黒褐 7.5YR3/1	灰黄褐 10YR5/2	細～粗砂
25	縄紋土器 深鉢		10.0	(3.4)	内外面篦ミガキ 底面篦ケズリ	灰黄褐 10YR5/2		細砂
26	縄紋土器 深鉢		7.4	(2.9)	外面未調整 内面ナデ 底面に円形の凹み	灰黄褐 10YR5/2	褐灰 10YR5/1	細～粗砂

第21図　ＳＲ１出土遺物実測図（１）（Ｓ：1/4）

るが，北岸は北端部で北方向に曲がっており，ＳＲ１は調査区の北側で彎曲すると考えられる。ＳＲ1の幅は約27.00mであり，確認面から河床までの深さは約2.07mを測る。河床南端部の標高は4.20m，北端部では3.85mであり，0.35mの比高差をもって南から北に低くなっている。両岸の斜面は非常に緩やかであるが，中央近くになると急傾斜で落ち込んでいる。河床の幅は2.10～5.00mであり，砂礫層となっており，直径0.30mの流木が2本確認された。埋土は第20図に示しているように，第4～15層の16層に分層される。第4層は近世条里型水田，第5層は中世条里型水田，第6層は古墳時代の水田土壌層，第7層は弥生時代後期～古墳時代の水田土壌層であり，ＳＲ１がほぼ埋没した後の微低地に堆積している。第6・7層は土層断面のみであるが畦畔状の高まりが数カ所検出される。第8～15層は縄紋時代晩期～弥生時代前期の堆積層であり，第12～14層はラミナ状堆積を呈する。

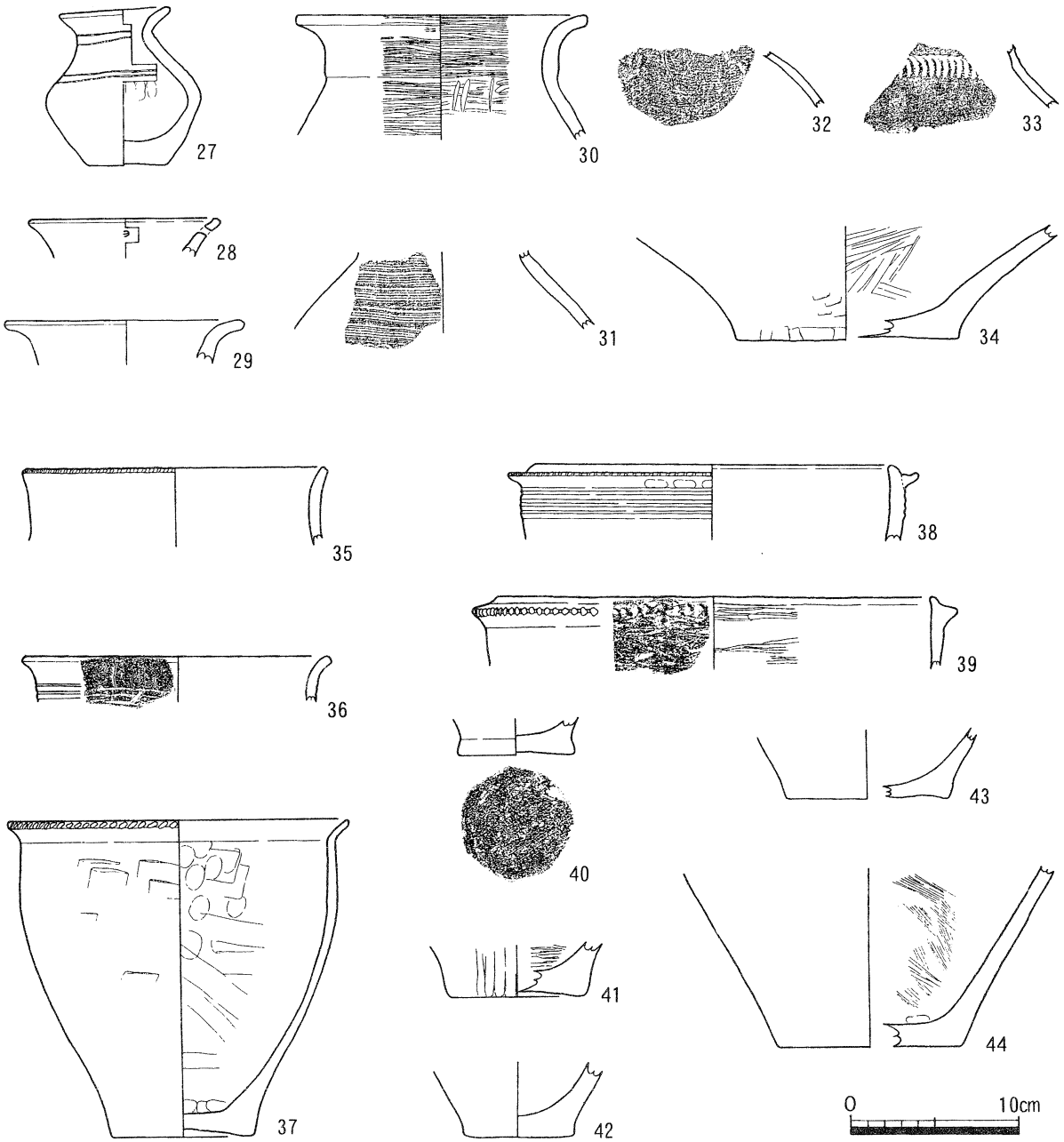
遺物は，縄紋土器深鉢（19～21・24～26・45・46），同浅鉢（22・23），弥生土器壷（27～34，47～49・54・55・72～85・121～123），同甕（35～44・50～52・56～65・86～95・125），同高杯（53・66～68・96～102），同鉢（69・109・124），同蓋（103～108），同器台（126），同製塩土器（70・71・110～114），土師器壷（115・116・127・132），同甕（117・118・128～131），同高杯（120・138～146），同鉢（119・135～137），同甑（134），須恵器杯蓋（147～153），同杯身（154～157），同甕（158），同壷（159・160），同椀（161），同甕（162），打製石庖丁（163～165），石鏃（166），石鍬（167），石製円盤（168），木製鍬（169），柄（170），泥除（171），加工木（172～175），加工板（176～178），その他の縄紋土器・弥生土器・土師器・須恵器片である。

第21図は河床直上より出土した土器，第22図は第8層～河床出土の土器，第23図は第7～8層出土の土器，第24～26図は第7層出土の土器，第27・28図は第6層出土の土器である。

19は直線的に外傾し，口縁端部直下に孔を有する。21・23・25は内外面に篦ミガキを施す。22は口縁端部内面を蒲鉾形に肥厚させ，内外面に篦ミガキを施す。

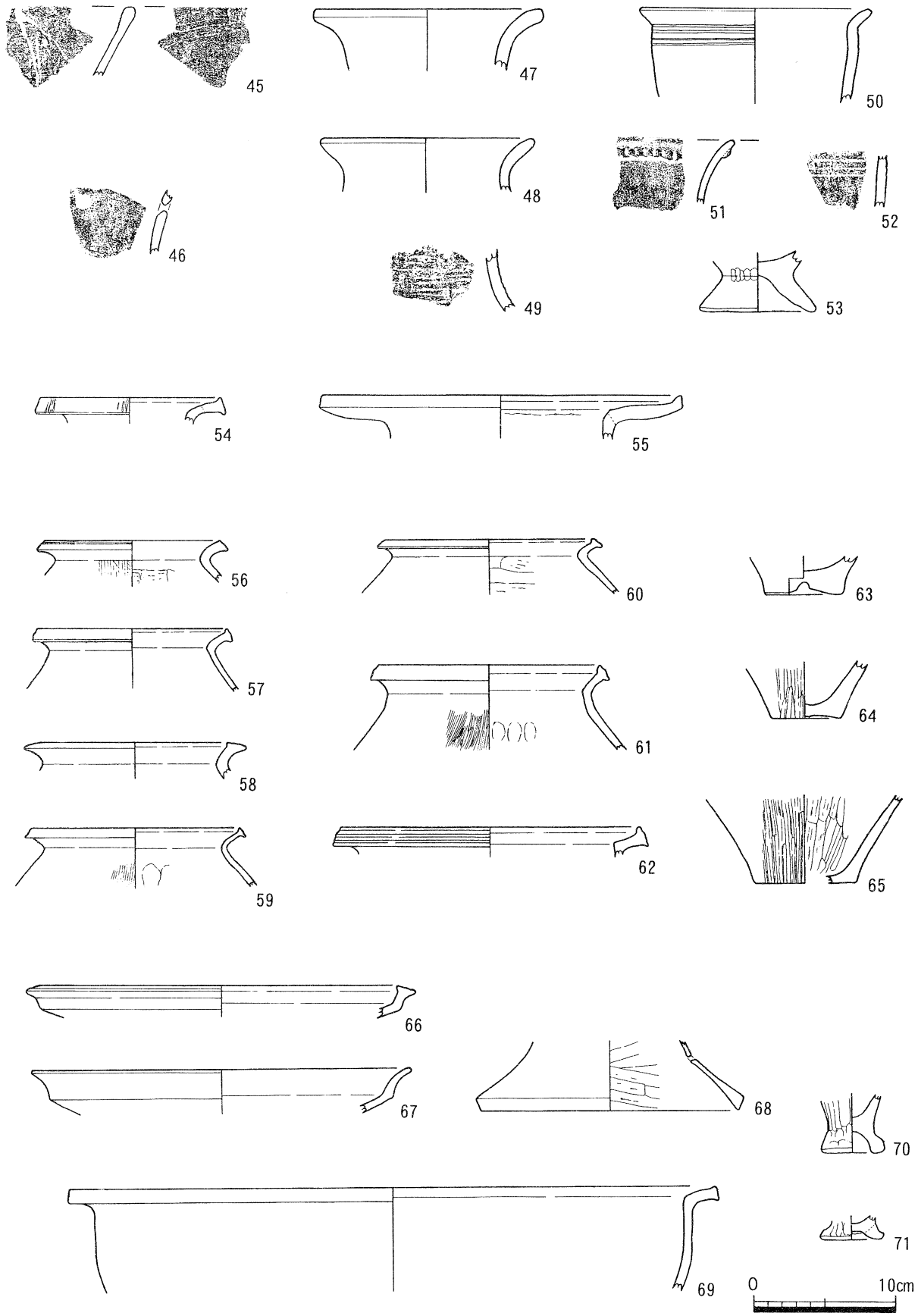
27は完形の小型壷であり，頚部に4分割で描く2条の沈線を巡らし，胴部上位に6分割で描く2条の沈線を巡らす。胴部外面下半に楕円形の黒斑がある。28～30は無紋の広口壷であり，28は口縁端部の下に円孔がある。29・30は口縁部が直立したのち外傾するプロポーションで，頚部にわずかな段を有する。31・32は櫛描直線紋と波状紋を巡らす。

35～37は「如意状」口縁で，35・37の口縁端部には刻目が施される。36には3条の沈線が残存



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
27	弥生土器 壷	5.5	5.0	9.4	外面ナデ 内面指頭圧痕・ナデ 沈線	灰白 2.5Y8/2		石英・長石多量
28	弥生土器 壷	10.8		(2.4)	内外面ナデ 円孔1個残存	灰黄褐 10YR4/2		石英・長石・角閃石
29	弥生土器 壷	13.8		(2.6)	内外面ナデ	鈍い黄橙 10YR7/3		石英・長石
30	弥生土器 壷	17.0		(7.5)	外面篦ミガキ 内面篦ミガキ・篦ナデ	黒 7.5YR2/1	灰黄褐 10YR5/2	石英・長石
31	弥生土器 壷			(4.7)	外面櫛描沈線紋・波状紋 内面篦ナデ	鈍い黄橙 10YR7/3	鈍い黄橙 10YR6/3	微～細砂
32	弥生土器 壷			(3.2)	外面櫛描沈線紋・波状紋 内面指頭圧痕・ナデ	鈍い褐 7.5YR5/3		微砂
33	弥生土器 壷		13.0	(6.8)	外面押圧紋・ナデ 内面ナデ	灰黄 2.5Y7/2		石英・長石・金雲母
34	弥生土器 壷	34.5	17.5	11.6	外面篦ナデ 内面篦ミガキ・篦ナデ	灰黄 2.5Y6/2		粗砂
35	弥生土器 甕	17.6		(4.7)	内外面ナデ 口縁部端部に刻目	黒 10YR2/1	黒褐 10YR2/2	細砂
36	弥生土器 甕	18.2		(2.9)	内外面ナデ 外面に沈線	鈍い黄橙 10YR4/3	鈍い黄橙 10YR5/3	石英・長石・角閃石
37	弥生土器 甕	20.2	8.5	18.7	外面篦ナデ・ナデ 内目指頭圧痕・ナデ 口縁端部刻目	褐灰 10YR5/1	黒褐 10YR3/1	細礫・角閃石
38	弥生土器 甕	21.0		(4.5)	口縁端部に刻目 外面に沈線紋	灰黄褐 10YR6/2	鈍い黄橙 10YR6/3	細礫多量
39	弥生土器 甕	26.0		(4.0)	内外面篦ミガキ 口縁端部外面に刻目	灰黄褐 10YR5/2	黒褐 10YR3/2	石英・長石多量
40	弥生土器 甕		6.8	(2.2)	内外面篦ミガキ 底面1方向の篦ナデ・ナデ	灰黄褐 10YR5/2	黄灰 2.5Y5/1	石英・粗砂
41	弥生土器 甕		7.8	(3.2)	外面篦ナデ 内面篦ミガキ	黒褐 10YR3/1	灰黄褐 10YR6/2	石英・粗砂
42	弥生土器 甕		6.6	(4.4)	内外面摩滅	鈍い赤褐 5YR5/4	黒 5YR1.7/1	石英・粗砂
43	弥生土器 甕		9.6	(4.1)	外面摩滅 内面ナデ・指頭圧痕	褐灰 10YR6/1	灰黄褐 10YR6/2	石英・粗砂
44	弥生土器 甕		10.8	(10.7)	外面摩滅 内面刷毛目	灰黄褐 10YR6/2	褐灰 10YR5/1	石英・長石多量

第22図　ＳＲ１出土遺物実測図（２）（Ｓ：1/4）



第23図　ＳＲ１出土遺物実測図（３）（Ｓ：1/4）

（第23図）

番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
45	縄紋土器 深鉢			(4.8)	外面ナデ 内面篦ミガキ	褐灰 7.5YR5/1		粗砂
46	縄紋土器 深鉢			(4.5)	内外面摩滅 円孔1個	褐灰 10YR5/1		粗砂多量
47	弥生土器 壷	15.6		(4.2)	内外面ナデ	鈍い黄橙 10YR7/3	灰白10Y8/2	石英・長石多量
48	弥生土器 壷	14.6		(3.8)	内外面摩滅	鈍い黄橙 10YR6/3		石英・細砂
49	弥生土器 壷			(3.7)	内外面ナデ 櫛描沈線紋8条	灰黄 2.5Y7/2		粗砂多量
50	弥生土器 甕	16.2		(6.5)	外面ナデ 沈線紋4条 内面摩滅	橙 7.5YR7/6	橙 5YR6/6	石英・長石多量
51	弥生土器 甕			(4.5)	外面ナデ・刻目突帯	鈍い黄橙 10YR6/3	灰黄褐 10YR5/2	細～粗砂
52	弥生土器 甕			(3.6)	内外面摩滅 外面沈線紋	灰黄褐 10YR6/2		細礫
53	弥生土器 高杯		8.2	(4.2)	内外面ナデ	鈍い褐 7.5YR5/3	鈍い褐 7.5YR6/3	石英・長石・角閃石
54	弥生土器 壷	12.4		(1.8)	横ナデ 口縁端部外面に3・4条単位の沈線紋	鈍い褐 7.5YR5/3		長石・角閃石
55	弥生土器 壷	25.3		(3.0)	横ナデ 口縁部は水平方向に広がる	浅黄 2.5Y7/3		石英・長石・角閃石
56	弥生土器 甕	12.0		(2.9)	胴部外面刷毛目 内面篦ケズリ 口縁端部浅い凹線紋	鈍い黄橙 10YR7/2		石英
57	弥生土器 甕	13.2		(4.3)	胴部内外面ナデ 口縁端部に浅い凹線紋	鈍い黄褐 10YR5/3		長石・角閃石
58	弥生土器 甕	12.8		(2.5)	内外面摩滅 口縁端部に浅い凹線紋	褐 7.5YR4/2		長石・角閃石
59	弥生土器 甕	14.6		(4.1)	胴部外面刷毛目 内面指頭圧痕	鈍い褐 7.5YR5/3		長石・角閃石
60	弥生土器 甕	14.4		(3.8)	外面横ナデ 内面篦ケズリ	鈍い黄橙 10YR6/3	灰黄褐10YR6/2	石英・長石
61	弥生土器 甕	15.2		(6.1)	胴部外面刷毛目 内面指頭圧痕・ナデ	鈍い褐 7.5YR5/3		石英・細砂
62	弥生土器 甕	20.8		(2.1)	横ナデ 口縁端部に浅い凹線紋	鈍い褐 7.5YR5/4		雲母・角閃石
63	弥生土器 甕		5.3	(2.7)	外面篦ケズリ後にナデ 底面に未貫通の孔有り	鈍い褐 7.5YR6/3	黒 2.5YR1.7/1	石英・長石多量
64	弥生土器 甕		4.7	(4.0)	外面篦ミガキ 内面篦ケズリ後にナデ	鈍い黄褐 10YR5/3		石英・長石多量
65	弥生土器 甕		7.0	(6.2)	外面篦ミガキ 内面篦ケズリ	鈍い黄橙10YR6/3	鈍い黄橙10YR6/4	石英・長石
66	弥生土器 高杯	24.8		(2.2)	横ナデ 口縁端部に浅い凹線紋	鈍い褐 7.5YR5/4		長石・角閃石
67	弥生土器 高杯	26.4		(3.1)	内外面摩滅	鈍い黄褐 10YR7/3		石英・長石
68	弥生土器 高杯		18.0	(4.8)	外面摩滅 内面篦ケズリ 孔1個残存	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い褐 7.5YR5/4	石英・長石
69	弥生土器 鉢	45.0		(7.2)	内外面摩滅	淡橙 5YR8/4	淡橙 5YR8/3	石英・長石
70	弥生土器 製塩土器		4.3	(4.1)	外面篦ケズリ 内面ナデ	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い黄橙 10YR6/4	長石・角閃石
71	弥生土器 製塩土器		4.2	(1.8)	外面篦ケズリ 内面ナデ	鈍い橙 5YR6/4	鈍い褐 7.5YR6/3	石英・長石

する。38・39は「逆L字形」口縁であり，口縁端部には刻目が施される。38は沈線紋の多条化傾向を見ることができる。

45・46は縄紋土器深鉢で，46は円孔を有する。

47・48は無紋の広口壷であり，49は櫛描沈線紋を施す。

50・52は「逆L字形」口縁であり，櫛描沈線紋を施す。51は「縄紋系」甕であり，口縁端部から少し下がった位置に刻目突帯を持つ。

54は口縁端部を上下に拡張させ，口縁端部外面に3ないし4本単位の押圧紋が施される。55は直立する頸部から水平方向に広がる口縁部を持ち，口縁端部は上方に拡張する。

56～62は肩部に最大径を持つ胴部から短く屈曲する口縁部を有し，口縁端部は上下もしくは片側に拡張が見られ，凹線を持つものもある。56・59・61の胴部外面は刷毛目，56・60の内面は篦ケズリ，59・61は指頭圧痕が施される。64・65は外面に篦ミガキ，内面に篦ケズリを施す。

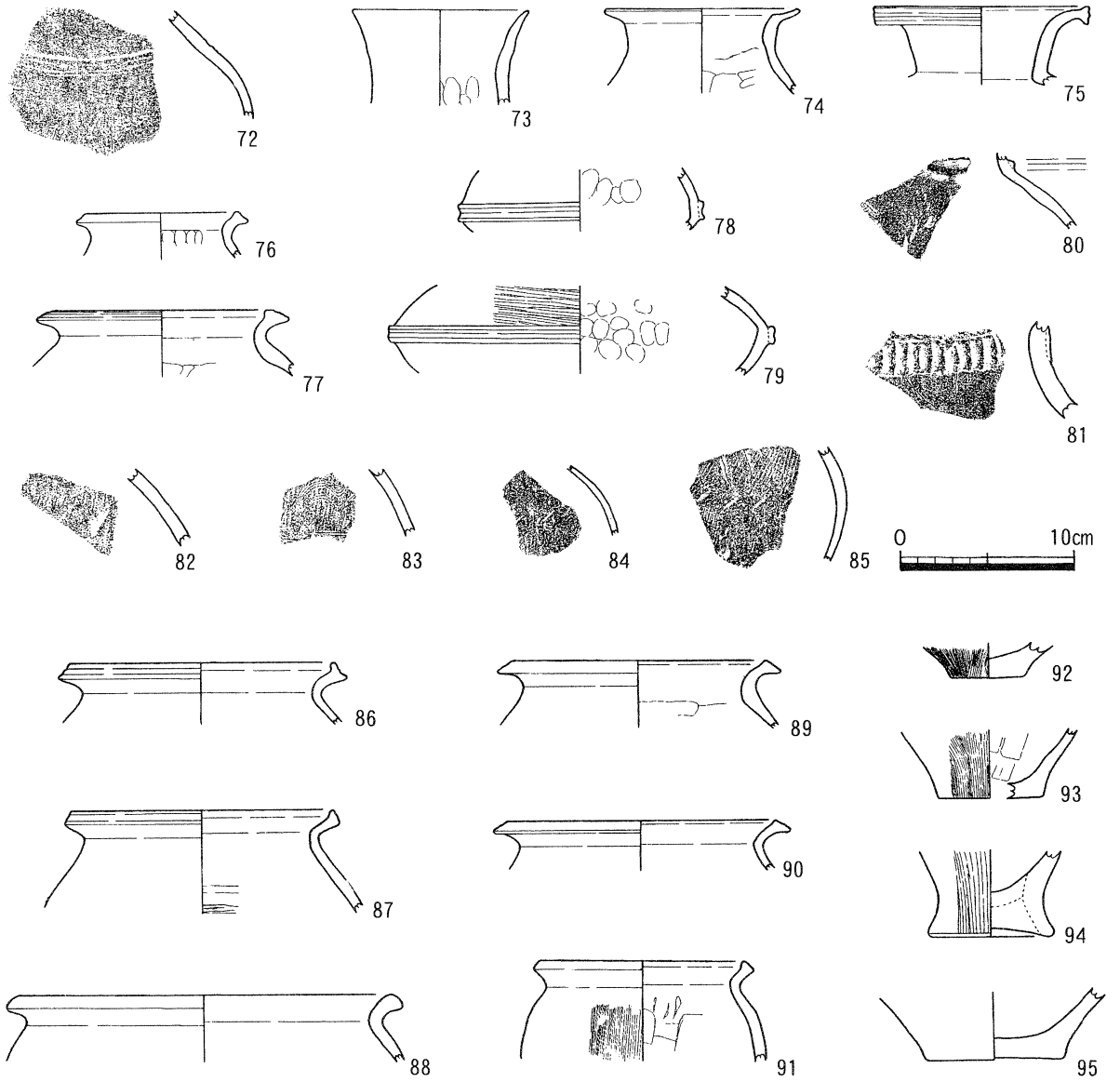
66は杯部が外上方に浅く伸びた後，屈曲して外上方に短く立ち上がる口縁部を有する。口縁端部は拡張し，浅い凹線を巡らす。67は浅く内湾気味に伸びた体部から屈曲して外上方に立ち上がる口縁部を有する。68の脚部は大きく広がり，裾部は肥厚する。

69は大型の鉢で，体部から外上方に短く伸びる口縁部を有する。

72は3条の篦描沈線を巡らす。73は長頸壷で，口縁部は横ナデが施される。74は短く直立する頸部から受け口状の口縁部を有する。75は外上方に開く頸部と大きく広がる口縁部を有し，口縁端部は上下に拡張し，凹線を巡らす。76・77は胴部から短く屈曲する口縁部を有し，口縁端部は上下に拡張が見られ，凹線を巡らす。78～80は算盤玉形の胴部であり，口縁部との境や最大径部に突帯を巡らせる。81は押圧紋を巡らす。82は貝殻による押圧，83は櫛描波状紋・直線紋，84は篦による押圧，85は刷毛原体による押圧が施される。

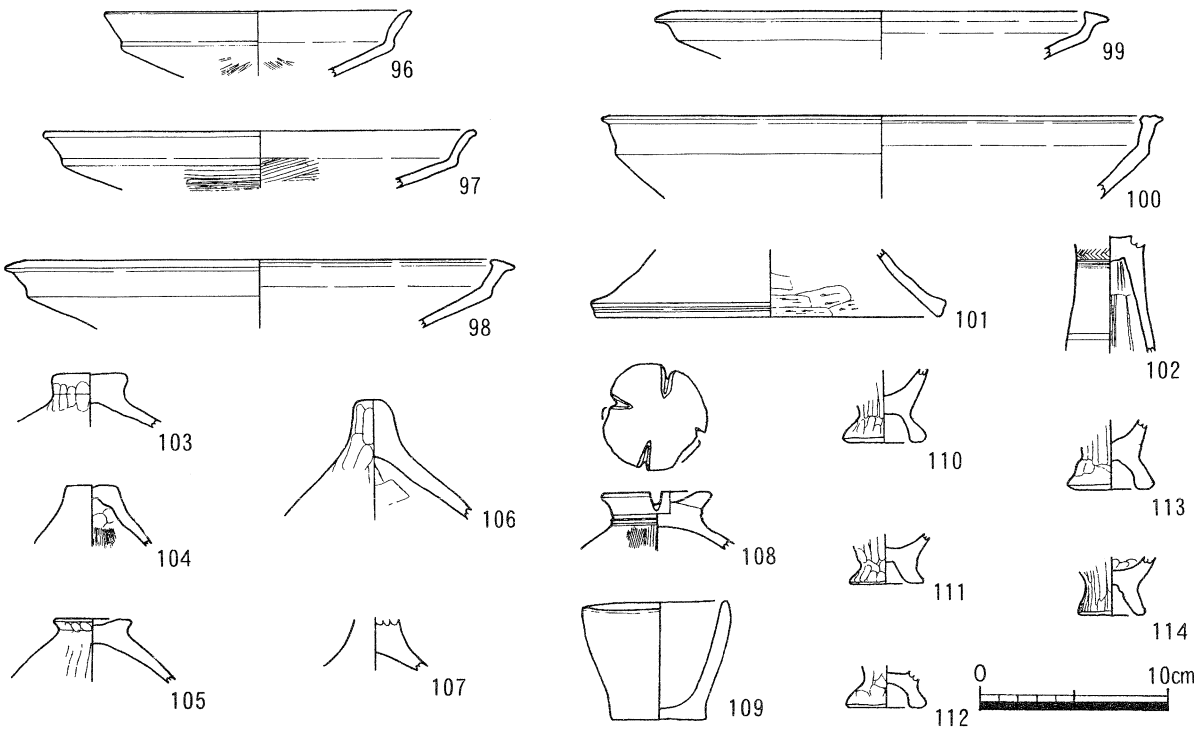
86～91は胴部から短く屈曲する口縁部を有し，口縁端部は上下に拡張が見られる。

96・97は浅く内湾気味に伸びた体部から屈曲して外上方に立ち上がる口縁部を有する。98～100は杯部が外上方に浅く伸びた後，屈曲して外上方に短く立ち上がる口縁部を有する。口縁端部は拡張し，浅い凹線を巡らす。101は直線的に大きく広がり，裾部はやや拡張する。102は斜行紋と3条と2条の沈線を巡らす。



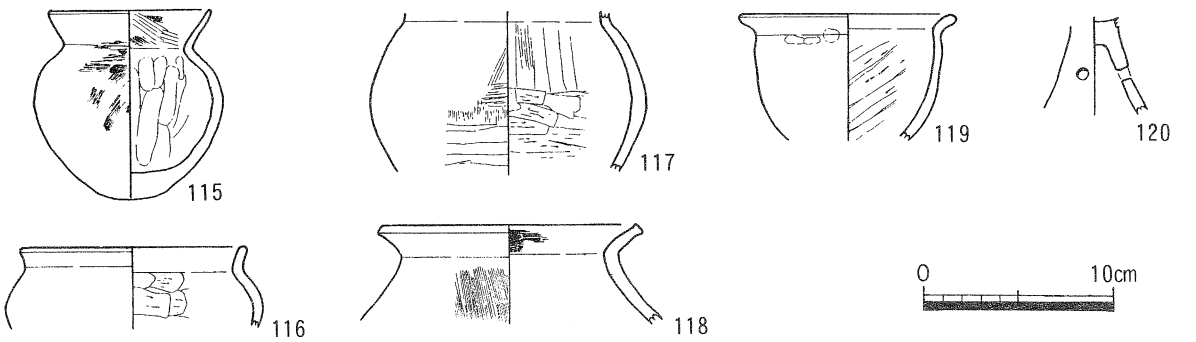
番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
72	弥生土器 壷			(6.1)	内外面ナデ 外面に沈線3条	灰黄褐 10YR6/2	鈍い黄橙 10YR6/3	石英・長石・角閃石
73	弥生土器 壷	10.2		(5.4)	外面横ナデ 内面横ナデ・指頭圧痕	鈍い褐 7.5YR5/3	鈍い橙 7.5YR6/4	石英・長石・角閃石
74	弥生土器 壷	11.0		(4.7)	外面ナデ 内面ナデ・篦ケズリ 受け口状	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い黄橙 10YR6/3	長石・角閃石
75	弥生土器 壷	12.4		(4.4)	頸部外面ナデ 内面ナデ・篦ナデ 口縁端部に凹線紋	灰黄褐 10YR6/2		石英・微～細砂
76	弥生土器 壷	8.8		(2.6)	外面ナデ 内面指頭圧痕	鈍い褐 7.5YR5/3		石英・長石・角閃石
77	弥生土器 壷	11.6		(3.7)	外面ナデ 内面篦ケズリ 口縁端部に浅い凹線紋	鈍い褐 7.5YR5/1		石英・長石・角閃石
78	弥生土器 壷			(3.5)	内外面ナデ 胴部中央に突帯	浅黄橙 10YR6/3	褐灰 10YR4/1	長石・角閃石
79	弥生土器 壷			(4.8)	外面上半篦ミガキ 下半ナデ 内面指頭圧痕	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い黄褐 10YR5/3	石英・長石・角閃石
80	弥生土器 壷			(4.4)	外面篦ミガキ 内面絞り目・指頭圧痕 頸部に突帯	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い黄褐 10YR5/3	微砂
81	弥生土器 壷			(5.5)	内外面ナデ 外面に押圧突帯	鈍い黄橙 10YR6/3	黄灰 2.5Y5/2	石英・角閃石
82	弥生土器 壷			(2.5)	外面に貝殻原体による押圧	鈍い黄橙 10YR7/3		石英・長石・角閃石
83	弥生土器 壷			(3.6)	外面櫛描波状紋・沈線紋 内面ナデ	浅黄橙 10YR6/3	黒褐 10YR3/1	石英・長石
84	弥生土器 壷			(4.2)	外面上半ナデ 下半刷毛目 櫛原体による押圧紋	鈍い黄褐 10YR5/3	褐灰 10YR4/1	石英・長石・角閃石
85	弥生土器 壷			(6.5)	外面刷毛目・櫛原体による押圧紋 内面篦ケズリ・篦ナデ	褐 7.5YR4/3		石英・長石・角閃石
86	弥生土器 甕	7・5		(3.5)	口縁部横ナデ 胴部内外面ナデ	鈍い黄 2.5Y6/3		石英・長石・角閃石
87	弥生土器 甕	15.0		(5.9)	口縁部横ナデ 胴部外面ナデ 内面ナデ・篦ケズリ	浅黄橙 10YR6/4		微砂
88	弥生土器 甕	21.0		(3.8)	内外面磨滅	鈍い褐 7.5YR5/4	灰黄褐 10YR5/2	石英・長石
89	弥生土器 甕	14.4		(3.9)	口縁部横ナデ 胴部外面ナデ 内面篦ケズリ	褐 7.5YR4/4	鈍い黄褐 10YR5/3	石英・長石
90	弥生土器 甕	15.2		(2.8)	内外面磨滅	鈍い褐 7.5YR6/3		角閃石多量
91	弥生土器 甕	11.6		(5.7)	胴部外面刷毛目・ナデ 内面篦ケズリ	鈍い黄褐 10YR5/3		石英・長石
92	弥生土器 甕		4.2	(2.0)	外面刷毛目 底面ナデ	暗灰 N3/1	暗灰黄 2.5Y4/2	石英・長石・角閃石
93	弥生土器 甕		6.0	(3.8)	外面刷毛目 内面篦ケズリ 底面ナデ	鈍い黄褐 10YR4/3		石英・長石・角閃石
94	弥生土器 甕		6.8	(4.9)	外面篦ミガキ 内面ナデ 接合痕	鈍い赤褐 5YR5/3	灰褐 7.5YR5/2	石英・長石
95	弥生土器 甕		8.0	(3.9)	内外面磨滅	鈍い黄橙 10YR6/3		石英・微～粗砂

第24図　ＳＲ１出土遺物実測図（４）（Ｓ：1/4）



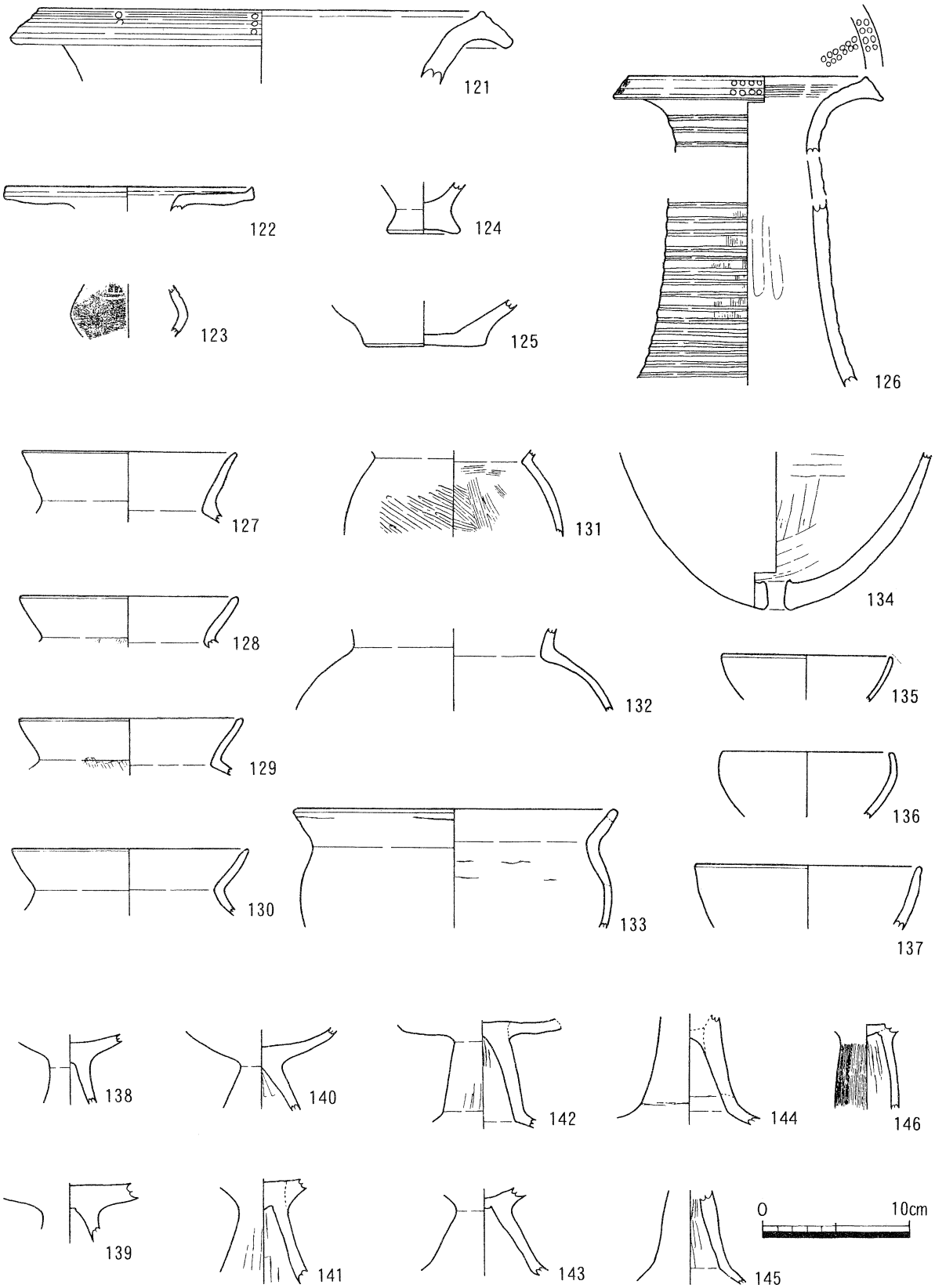
番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
96	弥生土器 高杯	16		(3.4)	口縁部横ﾅﾃﾞ 体部篦ﾐｶﾞｷ	鈍い褐 7.5YR5/4	鈍い褐 7.5YR5/3	石英・長石・角閃石
97	弥生土器 高杯	23		(3.0)	口縁部横ﾅﾃﾞ 体部篦ﾐｶﾞｷ	明赤褐 5YR5/6	鈍い褐 7.5YR6/3	石英・長石・角閃石
98	弥生土器 高杯	22.8		(3.6)	口縁部横ﾅﾃﾞ 体部ﾅﾃﾞ	鈍い褐 7.5YR6/3		石英・長石・角閃石
99	弥生土器 高杯	21.4		(2.5)	口縁部横ﾅﾃﾞ 口縁端部に浅い凹線紋	鈍い褐 7.5YR5/4		石英・長石・角閃石
100	弥生土器 高杯	29.6		(4.3)	口縁部横ﾅﾃﾞ 体部ﾅﾃﾞ 口縁端部に浅い凹線紋	灰褐 7.5YR5/2	鈍い褐 7.5YR5/3	石英・長石・角閃石
101	弥生土器 高杯		18.2	(3.5)	外面ﾅﾃﾞ 内面篦ｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	鈍い褐 7.5YR6/3	鈍い褐 7.5YR6/3	石英・長石・角閃石
102	弥生土器 高杯			(6.1)	外面ﾅﾃﾞ・羽状紋・沈線 内面篦ｹｽﾞﾘ	橙 7.5YR6/6		細砂
103	弥生土器 蓋		3.9	(2.9)	外面ﾅﾃﾞ・指頭圧痕 内面ﾅﾃﾞ	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い褐 7.5YR5/4	石英・長石・角閃石
104	弥生土器 蓋		2.7	(3.2)	外面ﾅﾃﾞ 内面刷毛目・指頭圧痕	鈍い橙 7.5YR7/4	灰黄褐 10YR5/2	石英・長石・角閃石
105	弥生土器 蓋		4.2	(3.3)	外面篦ﾅﾃﾞ・篦ｹｽﾞﾘ 内面ﾅﾃﾞ	鈍い橙 7.5YR6/4	明赤褐 2.5YR5/6	石英・長石・角閃石
106	弥生土器 蓋		1.0	(6.3)	外面ﾅﾃﾞ・篦ｹｽﾞﾘ 内面篦ﾅﾃﾞ	鈍い黄橙10YR6/3	鈍い黄橙 10YR6/4	石英・長石・角閃石
107	弥生土器 蓋			(2.7)	内外面摩滅	浅黄橙	灰白 2.5Y8/2	石英・長石
108	弥生土器 蓋		5.6	(2.8)	外面篦ﾐｶﾞｷ・篦ナデ 内面ナデ 抉り4個 外面赤色塗彩	鈍い褐 7.5YR6/3	灰黄褐 10YR6/2	石英・長石・角閃石
109	弥生土器 鉢	7.5	5.0	6.4	内外面ﾅﾃﾞ	鈍い黄橙 10YR7/2		石英・細礫
110	弥生土器 製塩土器		4.2	(2.7)	外面篦ｹｽﾞﾘ 内面ﾅﾃﾞ	鈍い黄橙 10YR6/2	鈍い黄橙10YR6/3	石英・長石・角閃石
111	弥生土器 製塩土器		4.0	(2.6)	外面篦ｹｽﾞﾘ 内面ﾅﾃﾞ	鈍い橙 7.5YR7/4		石英・長石
112	弥生土器 製塩土器		4.3	(2.2)	外面篦ｹｽﾞﾘ 内面ﾅﾃﾞ	鈍い黄橙 10YR6/3	灰黄褐 10YR6/2	石英・長石
113	弥生土器 製塩土器		4.6	(3.7)	外面篦ｹｽﾞﾘ 内面ﾅﾃﾞ	鈍い黄橙 10YR6/4		石英・長石
114	弥生土器 製塩土器		3.6	(3.1)	外面篦ｹｽﾞﾘ 内面ﾅﾃﾞ	鈍い橙 5YR6/4	鈍い橙 5YR7/4	石英・長石

第25図　ＳＲ１出土遺物実測図（５）（Ｓ：1/4）



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
115	土師器 壷	8.4		15.0	口縁部内面刷毛目後ﾅﾃﾞ 胴部内面指頭圧痕・指ﾅﾃﾞ	鈍い褐 7.5YR5/4		石英・長石・微砂
116	土師器 壷	12.0		(4.3)	外面ﾅﾃﾞ 内面篦ｹｽﾞﾘ	鈍い橙 7.5YR6/4	鈍い黄橙10YR6/3	石英・角閃石
117	土師器 甕			(8.5)	外面篦ﾐｶﾞｷ・刷毛目:篦ﾅﾃﾞ 内面指ﾅﾃﾞ・篦ｹｽﾞﾘ	鈍い黄橙 10YR6/3		微砂
118	土師器 甕	6.7		(5.2)	口縁部横ﾅﾃﾞ 胴部外面刷毛目 内面ﾅﾃﾞ	鈍い褐 7.5YR5/4		石英・長石・角閃石
119	土師器 鉢	11.6		(6.7)	外面摩滅 内面篦ｹｽﾞﾘ	明赤褐 5YR5/6	橙 5YR6/6	石英・長石・角閃石
120	土師器 高杯			(5.2)	内外面摩滅 円孔3個	明赤褐 5YR5/6	灰褐 7.5YR4/2	石英・長石

第26図　ＳＲ１出土遺物実測図（６）（Ｓ：1/4）



第27図　ＳＲ１出土遺物実測図（７）（Ｓ：1/4）

（第 27 図）

番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
121	弥生上器 壷	29.8		(4.9)	内外面摩滅 口縁端部凹線紋・竹管紋2組残存	鈍い黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/3	石英・長石多量
122	弥生上器 壷	16.8		(1.6)	内外面摩滅	灰黄 2.5Y7/2	鈍い黄橙 10YR7/3	石英・長石・角閃石
123	弥生上器 壷			(3.5)	外面ナデ・沈線	浅黄橙 10YR6/4	褐灰 10YR4/1	石英・長石・角閃石
124	弥生上器 鉢		5.0	(3.4)	内外面摩滅	浅黄 2.5Y7/4		石英・長石
125	弥生上器 底部		8.4	(3.1)	内外面摩滅	鈍い橙 5Y7/4	橙 2.5YR6/6	石英・長石
126	弥生上器 器台	16.0		(20.8)	外面刷毛目・ナデ 口縁端部に竹管紋8個単位4対	鈍い褐 7.5YR5/3		石英・長石
127	土師器 壷	14.4		(4.7)	口縁部摩滅 胴部内面篦ケズリ	鈍い黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/3	石英・長石
128	土師器 甕	14.6		(3.4)	口縁部外面横ナデ 内面摩滅 胴部外面刷毛目	鈍い黄橙 10YR7/2	鈍い黄橙 10YR7/3	石英・粗砂小量
129	土師器 甕	15.2		(3.8)	口縁部横ナデ 胴部外面刷毛目	鈍い黄橙 10YR7/4		石英・長石少量
130	土師器 甕	16.0		(4.5)	内外面摩滅	鈍い橙 5YR7/4		石英・長石少量
131	土師器 甕			(5.8)	外面ナデ・タタキ目 内面刷毛目	浅黄橙 10YR6/4		石英・長石少量
132	土師器 壷			(5.5)	頸部ナデ 胴部摩滅・剥離	鈍い橙 7.5YR7/4	黄灰 2.5Y5/1	石英・長石
133	土師器 甕	21.4		(8.0)	口縁部・胴部内面摩滅 胴部外面ナデ・接合痕	橙 7.5YR6/8	鈍い黄橙 10YR6/4	石英・長石多量
134	土師器 甑			(10.6)	外面摩滅 内面篦ケズリ 底部中央に円孔有り			石英・角閃石
135	土師器 鉢	11.4		(3.0)	内外面摩滅	橙 5YR7/6		石英・長石少量
136	土師器 鉢	11.6		(4.4)	外面摩滅 内面ナデ	鈍橙 5YR6/4		石英・長石・角閃石
137	土師器 鉢	15.2		(4.3)	内外面摩滅	鈍い黄橙 10YR7/3		石英・長石
138	土師器 高杯			(4.7)	内外面摩滅	橙 5YR7/6	橙 5YR7/8	石英・長石
139	土師器 高杯			(4.1)	内外面摩滅	浅黄橙 7.5YR8/3	鈍い橙 7.5YR7/3	石英・長石
140	土師器 高杯			(5.4)	内外面摩滅 脚部内面篦ケズリ	浅黄橙 7.5YR8/4		石英・長石多量
141	土師器 高杯			(7.1)	杯部ナデ 脚部外面篦ケズリ後にナデ 内面篦ケズリ	淡黄 2.5Y8/3		石英・長石
142	土師器 高杯			(7.2)	脚部外面篦ケズリ後にナデ 内面絞り目・ナデ 接合痕	鈍い黄橙 10YR7/4		細～粗砂
143	土師器 高杯			(5.9)	外面ナデ	灰黄褐 10YR6/2	鈍い黄橙 10YR7/2	細砂～細礫
144	土師器 高杯			(7.5)	内外面摩滅 接合痕	灰白 10YR8/2		微砂
145	土師器 高杯			(6.3)	外面摩滅 内面篦ケズリ	鈍い褐 7.5YR6/3		細砂～細礫
146	土師器 高杯			(5.7)	外面刷毛目 内面絞り目・ナデ	鈍い黄橙 10YR7/2	鈍い黄橙 10YR7/3	石英・長石少量

103～108 は蓋であり，103～105 は平坦，106 は棒状のつまみである。108 はつまみ部に抉りが 4 ヶ所入り，体部との境に 2 条の沈線を巡らす。その沈線の付近には赤色顔料が塗られている。

109 は完形の小型鉢で，平底の底部から直線的に立ち上がり口縁部に至る。

115 は完形の壷で，球形の胴部から口縁部は「く」の字形に外反する。底部の器厚は非常に厚い。胴部外面下半に円形の黒斑が見られる。116 は胴部から短く屈曲する口縁部を有する。

117・118 は「く」の字形口縁である。

121 は大型の壷で，口縁端部は下方に大きく拡張し，外面に凹線紋を巡らせ，竹管による押圧が見られる。123 は小型の壷で，縦と横方向の沈線がある。

126 は上下に「ハ」の字形に広がる形態の器台であり，口縁端部は上下に拡張して凹線紋を巡らす。竹管による円形押圧紋が口縁部内面に 12 個 1 対，口縁端部に 8 個 1 対が施され，土器全体としては 4 対の円形押圧紋が施されると推定できる。体部外面は凹線紋を多条に巡らす。

127～133 の口縁部は「く」の字形に外反する。

134 は底部中央に直径 1.5 cmの円孔を有する。

135～137 は半球形の体部で，136 の口縁部はやや内湾する。

138～145 は杯部下半がほぼ水平方向に伸び，脚部下位が外方に大きく屈曲する形態の高杯であり，摩滅により調整は不明である。142 の杯部は接合痕で割れており，144 は接合痕が明瞭である。

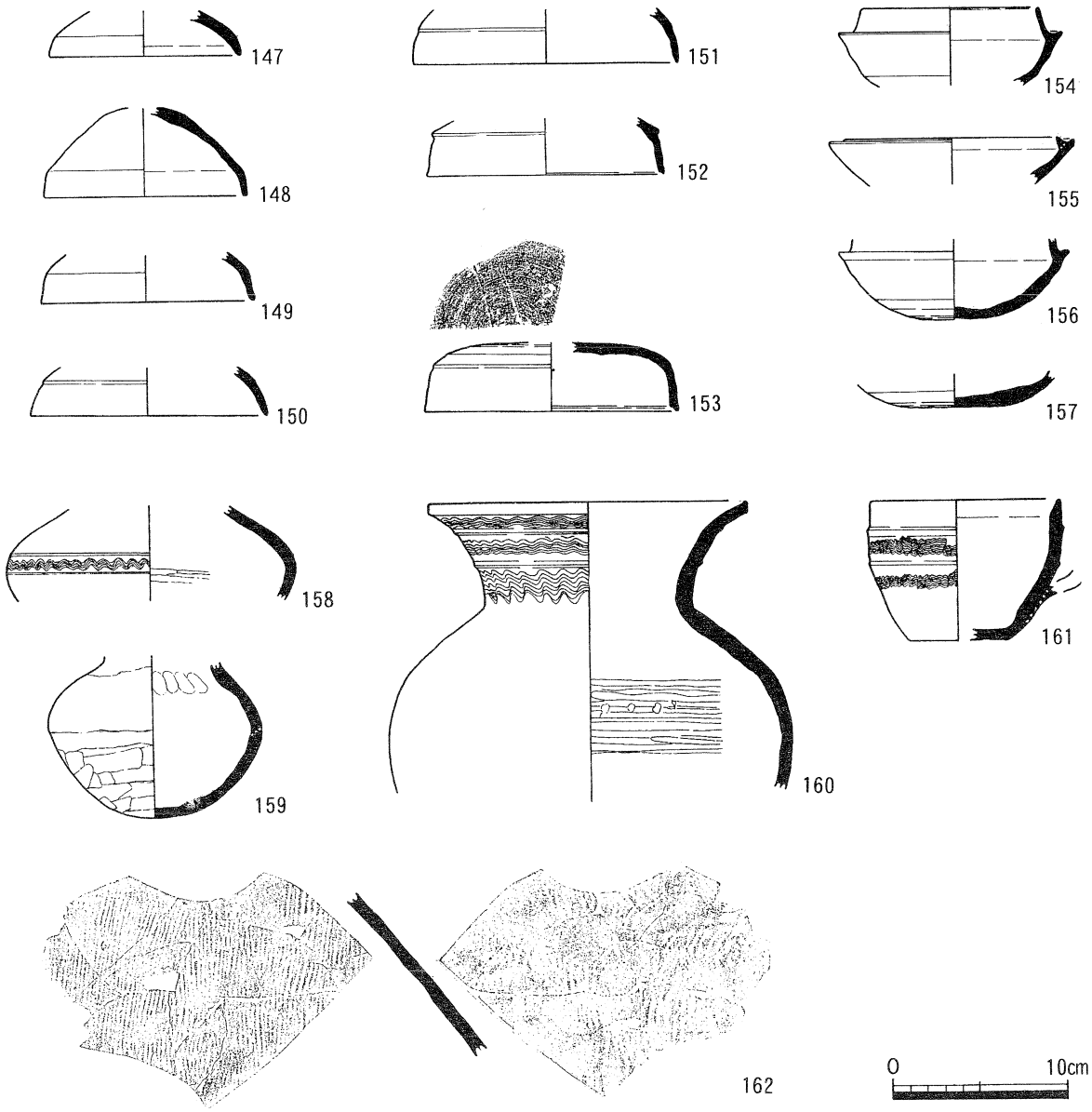
147 は器高の低い杯蓋で，天井部からほとんど稜を持たずに口縁部に至る。148 は器高が高く，天井部と口縁部の境にわずかな稜を有し，口縁部は直立気味である。149 はわずかな稜を有す。150・151 は天井部と口縁部の境に稜を有し，口縁部は直立気味である。口縁端部はやや尖る。152・153 は天井部と口縁部の境に稜を有し，口縁部は直立する。口縁端部は内面に段を持つ。153 は天井部外面に篦記号がある。

154・156 は水平の受け部から内傾する長い口縁部が付く。155 は斜めに延びる受部から内傾する短い口縁部が付いている。

158 は最大径部に 2 条の沈線と波状紋を巡らす。

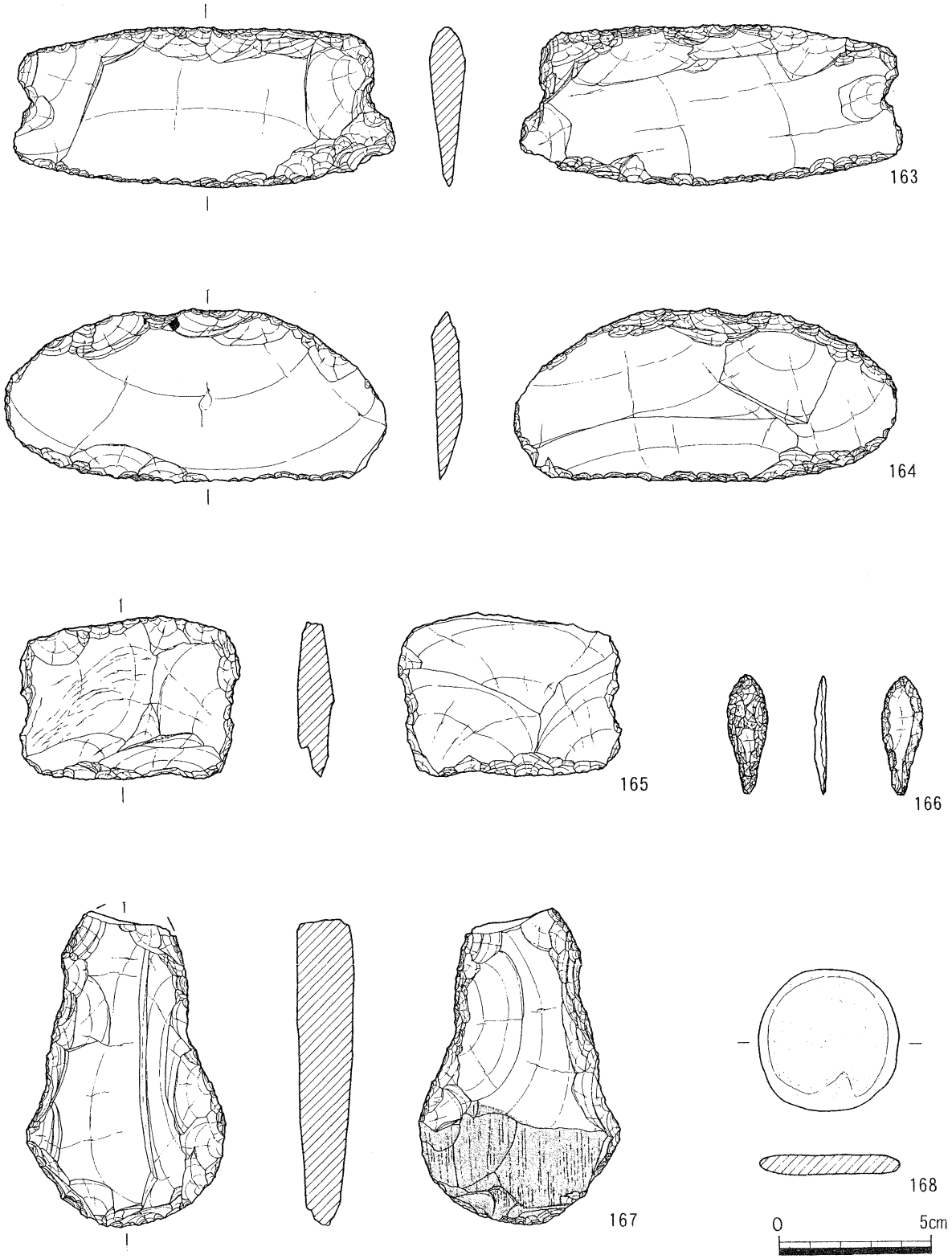
159 は小型の壷で，胴部外面上半と内面下位に自然釉がかかっている。160 は胴部から屈曲し大きく外反する口縁部であり，口縁部外面に 3 段の波状紋を巡らす。

161 は把手を欠損する鉢であり，口縁部と体部の境に稜を有し，体部外面に波状紋を 2 段巡らす。



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
147	須恵器 杯蓋	10.8		(3.3)	ナデ	灰白 2.5Y8/2	灰白 10YR8/2	精選
148	須恵器 杯蓋	11.6		(5.0)	回転ナデ 天井部外面篦ナデ	灰白 N7/	橙5YR7/6	精選
149	須恵器 杯蓋	12.2		(2.7)	回転ナデ	灰白 N8/		精選
150	須恵器 杯蓋	13.6		(2.7)	回転ナデ 外面に稜有り	暗緑灰 10G4/1	灰白 N7/	精選
151	須恵器 杯蓋	15.0		(3.1)	回転ナデ 外面に稜有り	灰白 N7/		精選
152	須恵器 杯蓋	13.6		(3.2)	回転ナデ 外面に稜有り	灰白 N8/		精選
153	須恵器 杯蓋	14.3		(3.9)	回転ナデ 天井部外面篦ケズリ・篦記号	灰白 N6/	灰白 N7/	精選
154	須恵器 杯身	10.0		(4.4)	回転ナデ 口縁部内面指ナデ 体部外面下半篦ケズリ	灰白 N6/		精選
155	須恵器 杯身	12.0		(2.6)	回転ナデ	灰白 N7/	灰NN5/	精選
156	須恵器 杯身			(4.5)	回転ナデ 体部外面下半篦ケズリ	灰白 N6/		精選
157	須恵器 杯身			(1.8)	回転ナデ 体部外面下半篦ケズリ	灰白 N7/		精選
158	須恵器 鼎			(5.3)	回転ナデ 内面絞り目・指ナデ・篦ナデ 波状紋	灰白 N7/	灰白 N6/	精選
159	須恵器 壷			(9.2)	外面回転ナデ・篦ケズリ 外面上半・内面下半に自然釉	灰白 N8/		粗砂若干
160	須恵器 壷	18.2		(16.3)	回転ナデ 胴部外面ナデ 内面篦ナデ 口縁部波状紋	灰白 N6/		精選
161	須恵器 椀	11.6	5.6	7.9	回転ナデ 胴部外面下半篦ナデ 波状紋	灰白 N7/	明青灰 5PB7/1	精選
162	須恵器 甕			(9.1)	外面平行タタキ目 内面青海波状タタキ目	灰白 N7/		精選

第28図 ＳＲ１出土遺物実測図（８）（Ｓ：1/4）



番号	器　種	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
163	打製石庖丁	12.5	5.2	1.2	84.5	サヌカイト	両端に抉り。刃部は大剥離面を両面から調整する
164	打製石庖丁	12.5	5.6	0.8	86.8	サヌカイト	刃部は直線　背部は湾曲。刃部は両面から調整する
165	打製石庖丁	7.3	5.3	1.2	52.8	サヌカイト	両端に僅かな抉りを持つ
166	石鏃	3.9	1.3	0.4	2.3	サヌカイト	凸基有茎式。縁辺部は両面から細かい調整を行う
167	打製石鍬	(10.3)	6.6	1.8	127.9	サヌカイト	刃部の片面のみ摩耗し使用痕が明瞭に見える
168	石製円盤	4.6		0.6	30.1	蛇紋岩	

第29図　ＳＲ１出土遺物実測図（９）（Ｓ：1/2）

163～166・168は第7層，167は第8層～河床より出土した石器である。

163は両端に抉りのある打製石庖丁であり，刃部は大剥離面を利用し，縁辺部を両面からの調整によって刃を付ける。背部は両面からの調整により背潰しを行う。164は直線的な刃部で背部が湾曲する形態であり，刃部は大剥離面を利用し，縁辺部を両面からの調整によって刃を付ける。背部は両面からの調整で背潰しを行う。165は小型の打製石庖丁で，両端に抉りがある。

166は縁辺部に両面からの細かい調整を行い，表面には細かい調整を行うが裏面には平坦な剥離面がある。

167の形状は刃部が広く，基部が狭いバチ形を呈する。刃部の片面には使用による磨滅と擦痕が見られる。

174は第7層，169～173・175～178は河床直上に出土した木器である。

169は軸部を欠損する鍬身である。軸部と刃部との境が明瞭で，刃部の両側がほぼ平行する。奈良国立文化財研究所編『木器集成図録　近畿原始編』（1993.3）の「曲柄平鍬CⅡ式」である。刃部の断面形は平坦な板状で，前面・後面の区別が不明瞭である。全面に細かい加工が施される。

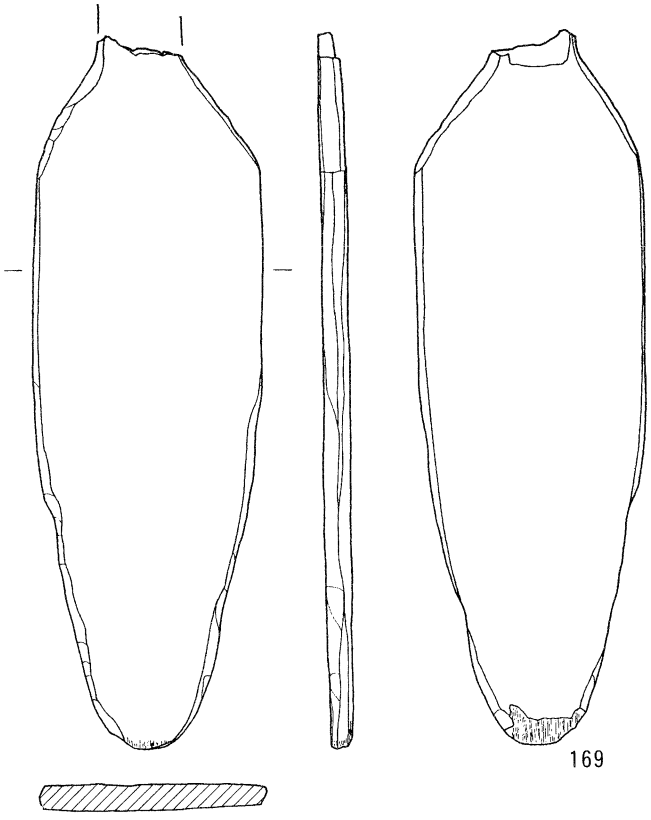
170は169の近くから出土し，柄の可能性がある。上端は全方向からの加工が行われ，単なる棒状の柄（『木器集成図録』の「Ⅰa型」）である。

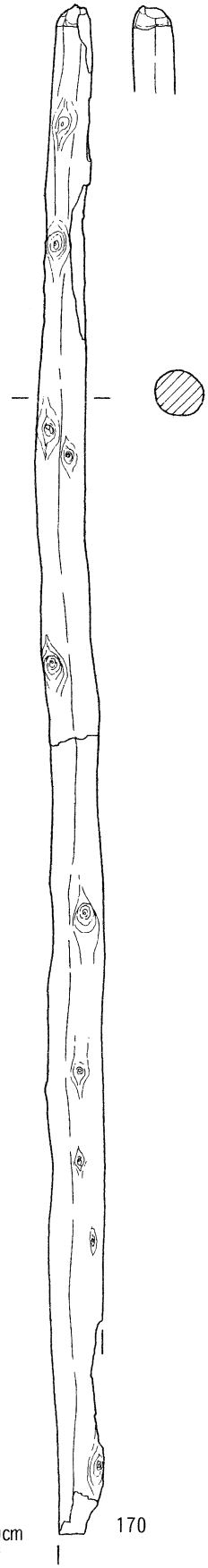
171は泥除の未製品で，平面形は隅丸正方形を呈し，断面形は周囲から中央に向かって膨らむ笠形になる。『木器集成図録』の「泥除Ⅱ式」である。

172・173は先端部を焼いており，174は全面を焼いている。

175は端部に加工が行われている。加工はやや不明瞭である。

176～178は柾目の板材であり，幅10㎝前後を測りほぼ同一規模のものである。全面に加工が行われている。

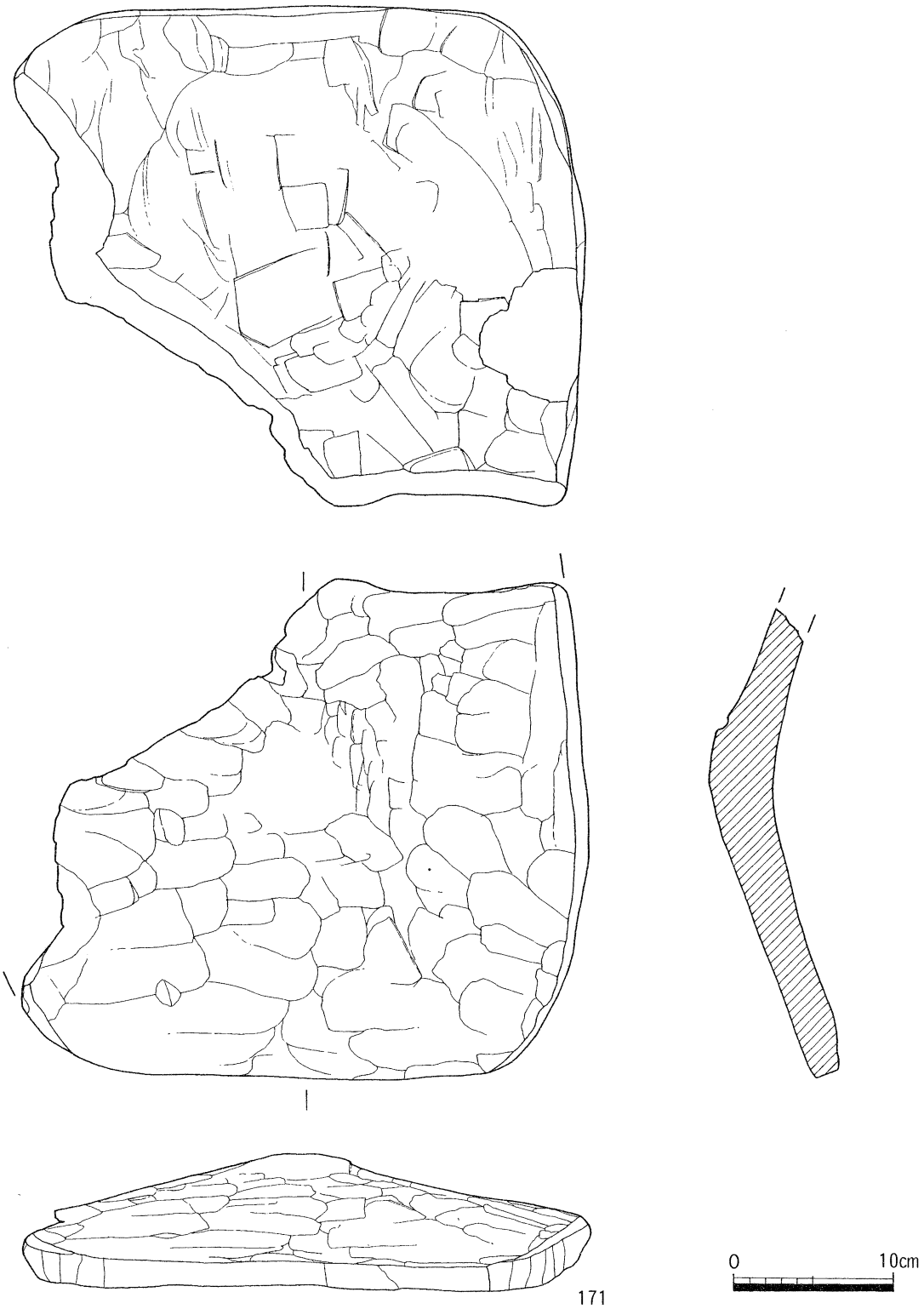




第30図　ＳＲ１出土遺物実測図（10）（Ｓ：1/4）

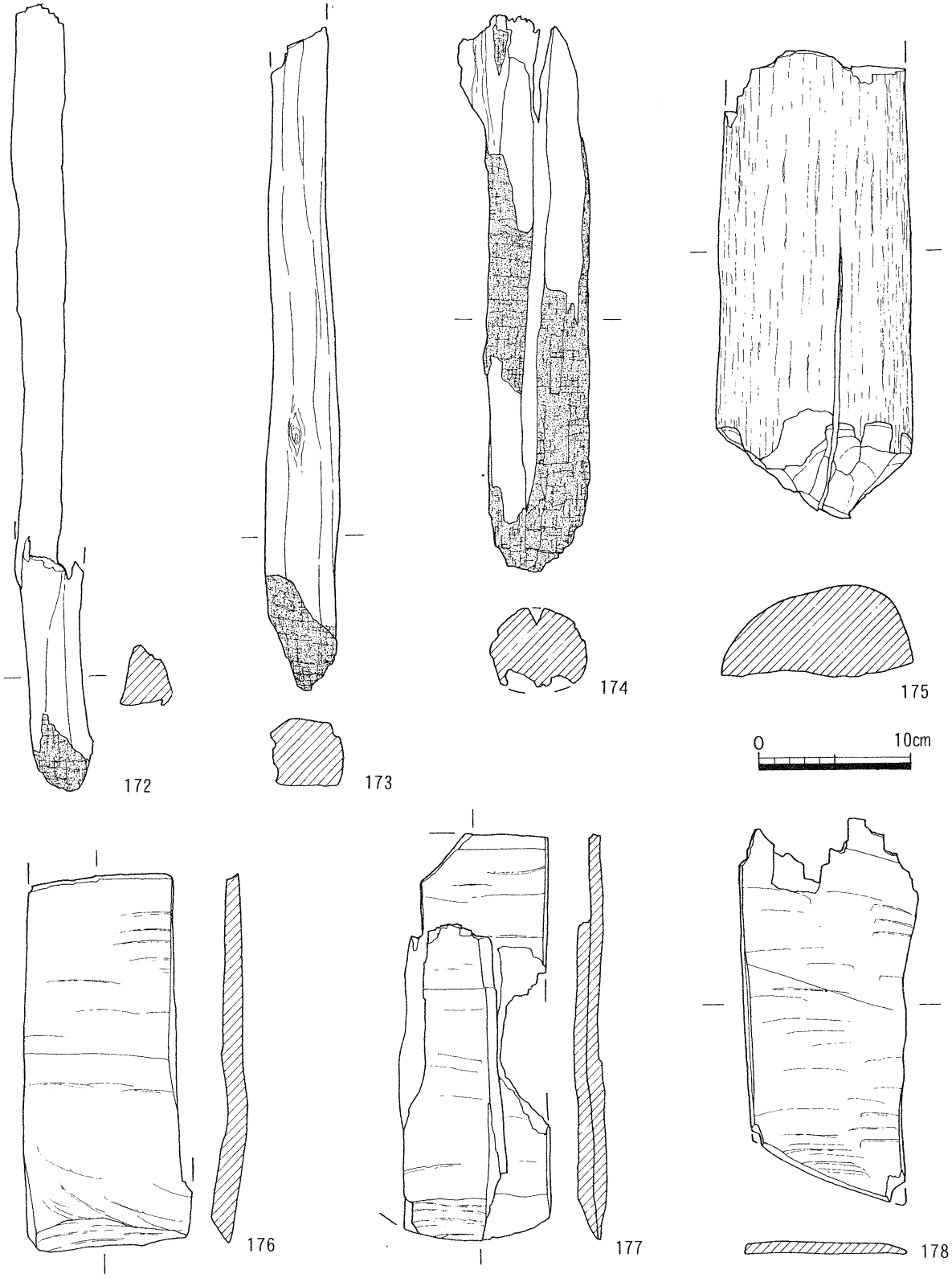
（第30図）

番号	器　種	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
169	平鍬	(37.6)	12.1	1.4			柄を欠損。全面に細かい加工。柾目
170	加工木	(90.0)	2.9				端部を全方向から加工。柄の可能性



番号	器　種	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
171	泥除	(35.5)	(30.8)	2.5～4.1			全面に細かい加工を施す。板目

第31図　ＳＲ１出土遺物実測図（11）（Ｓ：1/4）



番号	器種	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
172	加工木	(51.4)	3.5	3.9			ミカン割り。 端部は焼かれる。
173	加工木	(43.3)	(4.6)	4.3			端部は焼かれる
174	加工木	(36.5)	6.5				丸木。全面が焼かれる。
175	加工木	(30.8)	12.5	6.0			丸木を半截。端部を加工する。
176	加工板	(24.6)	11.0	1.5			柾目。端部を斜めに切断。加工痕が若干残る。
177	加工板	26.5	(9.8)	1.0			柾目。端部を斜めに切断。加工痕が若干残る。
178	加工板	(25.2)	10.6	0.8			柾目。両面を加工する。

第32図　ＳＲ１出土遺物実測図（１２）（Ｓ：1/4）

第４章　　自然科学的分析

第１節　東中筋遺跡の花粉化石

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

ほぼ遺跡全体が旧河道にあたる東中筋遺跡においては平成11年度および12年度に発掘調査が行われ，平成11年度調査では流路の埋土から縄文時代晩期～古墳時代末までの遺物が出土している。また平成12年度調査では弥生時代後期と考えられている畦畔が検出されている。以下には旧河道より採取された土壌試料について花粉分析を行い，弥生時代を中心とした東中筋遺跡周辺の植生変遷について検討した。

１．試料と分析方法

分析試料は旧河道断面中央部の埋積土層６層～14層より採取された１０試料である。各試料について，試料１（６ａ層）は黒灰褐色の砂質シルト，試料２（７ａ層）はやや粘土質の黒褐色砂質シルトである。試料３，４（８層）は黒褐色の粘土で，試料３はややシルト質である。試料５（９層）は黒色の粘土，試料６（10層）は黒～黒褐色の粘土で，黄灰色のシルト小塊（結核？）が点在している。試料７（12層）は黒～黒褐色のシルト質粘土で，本層においても黄灰色のシルト小塊が少し認められる。試料８（13層上部）はやや泥炭質の黒～黒褐色粘土，試料９（13層下部）はやや泥炭質の黒色砂質粘土，試料 10（14 層）は黒色の砂質泥炭質粘土である。各試料の時代について，試料１，２（６ａ層，７ａ層）が７世紀，試料３～６（８層～10層）が弥生時代後期，試料８，９（13層）が弥生時代前期～中期，試料10（14層）は縄紋時代晩期～弥生時代前期と考えられている。また，８層～15層が旧河道の埋土である。なお旧河道の断面については別章を参照して頂きたい。花粉分析はこれら１０試料について以下のような手順にしたがって行った。

試料（湿重約３～４ｇ）を遠沈管にとり，10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後0.5㎜目の篩にて植物遺体などを取り除き，傾斜法を用いて粗粒砂などを除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え30分間放置する。水洗後，重液分離（臭化亜鉛溶液：比重2.1を加え遠心分離）を行い，浮遊物を回収し水洗する。次に，酢酸処理，続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の混酸を加え３分間湯煎）を行う。水洗後，残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い，その際サフラニンにて染色を施した。また，花粉化石の単体標本を適宜作成し，各々にPLC.SS番号を付し形態観察用および保存用とした。

２．分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉48，草本花粉32，形態分類を含むシダ植物胞子５の計85である。これら花粉・胞子の一覧を表１に，また主要な花粉・胞子の分布を図１に示した。なお分布図について，樹木花粉は樹木花粉総数を，草本花粉・シダ植物は全花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。図および表においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し，クワ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるが，各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括していれてある。また分布図に地質柱状図を示したが，試料１，２は他試料（旧河道中央部）とは別地点（岸寄り）より採取されたものであり，この柱状図は模式的に記したものである。

検鏡の結果，樹木花粉に特徴的な産出傾向が認められたことから３つの花粉化石群集帯（下位よりⅠ～Ⅲ）を設定した。

花粉帯Ⅰ（試料９，10）はコナラ属アカガシ亜属の優占で特徴づけられる。次いで多く認められたの

表 1　産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
樹木											
マキ属	*Podocarpus*	-	-	1	4	4	2	3	2	2	1
モミ属	*Abies*	1	1	2	6	3	2	2	2	2	1
ツガ属	*Tsuga*	4	2	6	16	7	2	3	7	5	1
トウヒ属	*Picea*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	7	2	18	11	9	7	2	6	2	2
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	2	1	5	6	3	2	2	5	3	2
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	9	8	9	15	5	14	12	6	5	7
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	36	22	25	32	28	59	19	26	15	8
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	25	27	21	57	54	56	59	94	23	28
ヤナギ属	*Salix*	-	-	-	-	-	5	6	1	-	5
ヤマモモ属	*Myrica*	-	1	5	-	-	-	-	-	-	1
クルミ属	*Juglans*	-	3	1	1	-	1	1	-	1	1
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	8	10	14	3	5	3	5	3	3	1
カバノキ属	*Betula*	1	4	4	2	-	2	-	-	1	-
ハンノキ属	*Alnus*	2	1	3	2	3	1	1	-	-	-
ブナ	*Fagus crenata* Blume	-	-	3	-	1	1	-	-	1	-
イヌブナ	*Fagus japonica* Maxim.	-	3	1	-	1	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	44	52	67	22	24	29	14	6	24	13
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	52	119	124	36	48	34	72	33	103	96
クリ属	*Castanea*	4	1	1	-	1	2	3	2	8	9
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	21	30	25	11	7	8	7	8	9	18
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	2	2	9	6	3	3	5	1	-	3
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	1	1	-	2	1	7	3	3	8
ヤドリギ属	*Viscum*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
カツラ属	*Cercidiphyllum*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
シキミ属	*Illicium*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
イスノキ属	*Distylium*	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
フウ属	*Liquidamber*	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
サクラ属近似種	cf. *Prunus*	-	-	-	-	-	-	-	-	34	5
キハダ属	*Phellodendron*	-	-	-	1	-	-	1	1	-	-
センダン属	*Melia*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ユズリハ属	*Daphniphyllum*	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	*Rhus*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
モチノキ属	*Ilex*	-	-	1	-	-	1	-	-	1	-
ニシキギ科	Celastraceae	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-
カエデ属	*Acer*	1	1	1	1	1	1	3	1	-	-
トチノキ属	*Aesculus*	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-
ブドウ属	*Vitis*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5
ツタ属	*Parthenocissus*	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
マタタビ属	*Actinidia*	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
サカキ属－ヒサカキ属近似種	cf. *Cleyera-Eurya*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
グミ属	*Elaeagnus*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ハイノキ属	*Symplocos*	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	*Ligustrum*	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1
トネリコ属	*Fraxinus*	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ニワトコ属近似種	cf. *Sambucus*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ガマズミ属	*Viburnum*	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
草本											
ガマ属	*Typha*	1	1	-	2	2	9	23	31	16	12
ヒルムシロ属	*Potamogeton*	-	-	-	-	2	-	-	-	1	1
サジオモダカ属	*Alisma*	1	2	1	-	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	*Sagittaria*	14	8	35	20	4	1	1	-	-	-
スブタ属－ミズオオバコ属	*Blyxa - Ottelia*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	116	193	531	298	151	116	86	96	85	39
カヤツリグサ科	Cyperaceae	30	21	18	68	96	129	165	57	18	17
ミズアオイ属	*Monochoria*	1	-	8	6	10	-	-	1	-	-
ユリ科	Liliaceae	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-
クワ科	Moraceae	1	-	2	5	8	5	4	37	94	24
ギシギシ属	*Rumex*	2	-	1	-	2	3	-	-	7	5
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	8	4	1	3	3	2	1	1	2	-
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	-	-	-	1	-	-	1	1	7	7
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	1	-	3	3	1	1	1	-	-	1
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1	-	1	3	3	3	-	2	-	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	1	-	2	-	1	4	3	-	2	1
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	2	-	-	1	6	12	16	2	2	4
アブラナ科	Cruciferae	2	1	1	-	-	-	1	1	-	-
バラ科	Rosaceae	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
マメ科	Leguminosae	4	-	-	4	1	3	6	2	16	19
キカシグサ属	*Rotala*	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-
フサモ属	*Myriophyllum*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	3	8	3	4	-	-	-	-	5	7
ヒルガオ属	*Calystegia*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シソ科	Labiatae	-	-	-	-	-	-	2	1	1	-
オオバコ属	*Plantago*	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-
アカネ属－ヤエムグラ属	*Rubia - Galium*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヘクソカズラ属	*Paederia*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ゴキヅル属－アマチャヅル属	*Actinostemma - Gynostemma*	-	-	-	-	-	-	-	-	6	1
ヨモギ属	*Artemisia*	22	23	26	8	6	8	4	11	131	51
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	3	4	5	1	2	-	2	3	1
タンポポ亜科	Liguliflorae	1	5	1	8	-	3	1	1	-	1
シダ植物											
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	1	1	1	2	-	1	-	-	-	-
ミズワラビ属	*Ceratopteris*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
サンショウモ	*Salvinia natans*	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
単条型胞子	Monolete spore	10	2	3	7	5	3	4	1	2	2
三条型胞子	Trilete spore	2	3	1	1	2	1	3	2	1	1
樹木花粉	Arboreal pollen	222	294	353	233	212	237	233	208	247	216
草本花粉	Nonarboreal pollen	214	270	642	440	297	302	315	247	398	192
シダ植物胞子	Spores	13	6	6	11	7	5	7	3	3	3
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	449	570	1001	684	516	544	555	458	648	411
不明花粉	Unknown pollen	62	29	6	51	57	72	39	39	26	18

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

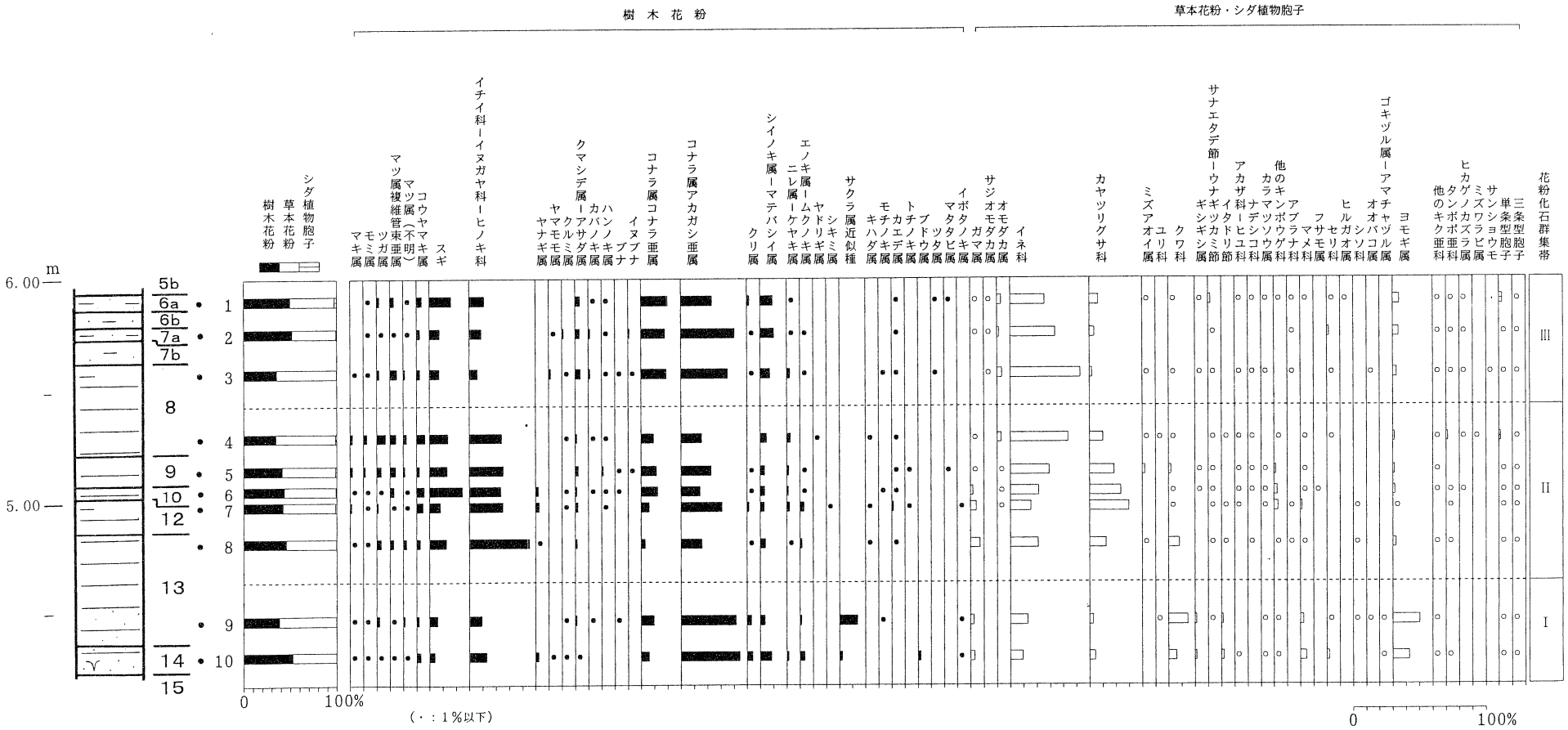


図1　東中筋遺跡の花粉化石分布図

（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は 花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

はイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）やコナラ属コナラ亜属で出現率は10%前後を示し，スギやシイノキ属－マテバシイ属（以後シイ類と略す）が５%前後得られている。またサクラ属近似種が試料９において約14%を示すなど本帯において特徴的に産出している。草本類では試料９において約20%を示しているヨモギ属が最も多く，次いで多いイネ科やクワ科は10%前後検出されている。その他，ガマ属，カヤツリグサ科，ギシギシ属，イタドリ節，マメ科が２試料とも１%を越えて得られている。

花粉帯Ⅱ（試料４～８）はアカガシ亜属の半減とヒノキ類の増加で特徴づけられる。スギも試料６において出現率が約25%に達するなどやや増加しており，ツガ属やマツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）も同様である。その他ではコナラ亜属が10%前後の出現率を示し，コウヤマキ属，クマシデ属－アサダ属，シイ類が全試料１%を越えて得られている。草本類ではイネ科の減少傾向からの急増と，それとは対称的なカヤツリグサ科の増加・減少が特徴的である。またⅠ帯で最も多く得られていたヨモギ属の激減も特徴的であり，クワ科も減少している。その他では水生植物（抽水植物）のガマ属が本帯最下部において約７%を示すなどやや多く得られていたが上位に向かい減少している。反対にオモダカ属（抽水植物）は本帯最下部試料を除き得られ，上位に向かい多く観察されており，ミズアオイ属（抽水植物）も試料５において１%を越えるなど若干検出されている。

花粉帯Ⅲ（試料１～３）はアカガシ亜属の再びの優占で特徴づけられるが最上部試料１では出現率を下げている。コナラ亜属が20%弱に増加してアカガシ亜属に次いで高い出現率を示しており，シイ類やクマシデ属－アサダ属も出現率を上げている。一方ヒノキ類は急減するものの上位に向かい緩やかな増加傾向が認められ，スギも同様である。草本類ではイネ科がさらに出現率を上げ，その後上位に向かい出現率を下げている。反対に低率ではあるがカヤツリグサ科が増加傾向を示しており，ヨモギ属も同様である。水生植物ではオモダカ属が全試料１%を越え，サジオモダカ属（抽水植物）も全試料で認められている。その他，ガマ属，ミズアオイ属，セリ科，オオバコ属などが若干得られている。

３．東中筋遺跡の植生変遷

これまで花粉分析の結果を示してきたが，ほぼ同試料を用いてプラント・オパール分析も行われており，この結果も合わせ弥生時代を中心とした東中筋遺跡周辺の植生変遷について示す。

弥生時代前期：花粉帯Ⅰに当たり，遺跡周辺丘陵部では稜線を中心にアカガシ亜属やシイ類を主体とした照葉樹林が広く成立していた。またこの丘陵部では斜面を中心にヒノキ類やスギの林がみられ，コナラ亜属を主体にクリ属やサクラ属近似種などを交えた落葉広葉樹林も一部に成立していた。このコナラ亜属は河川周辺の微高地にも生育していたと推測され，他にエノキ属－ムクノキ属などもみられたであろう。さらにこれら森林の林縁部にはケネザサなどのネザサ節型のササ類やススキ，チガヤなどのウシクサ族が生育しており，ケネザサ－ススキ群落といったような草地を形成していたであろう。一方河川部では，水際にガマ属やヨシ属が，また岸辺にはヤナギ属や樹木と予想されるクワ科（ヤマグワ？）などが生育しており，ヨモギ属を中心にギシギシ属やイタドリ節，ゴキヅル属－アマチャヅル属などの草本類が土手などに広く分布していた。

弥生時代中期から後期：花粉帯Ⅱに当たり，丘陵部に広く成立していた照葉樹林はやや縮小し，代わってスギやヒノキ類の林が分布を拡大した。これについて，大阪の河内平野では弥生時代のⅢ期末またはⅣ期初頭に黎明期を迎えた洪水時代はⅤ期には発展期とも言うべき段階に至った（那須　1989）と考えられている。時代はほぼ弥生時代の中期から後期に当たり，河内平野でみられた気象現象は当然ながら高松市周辺にも起こったと考えられる。この洪水あるいは多雨といった現象で遺跡周辺の丘陵部では土地が不安定となり，照葉樹林はその影響を受けて縮小したものと推測される。一方スギや

ヒノキ類はこうした所にも生育が可能であり，照葉樹林が成立できなくなった跡地に侵入し，林分を広げたのであろう。またニヨウマツ類も同様のことで多少増加したとみられ，その他モミ属やツガ属，コウヤマキ属などの針葉樹類がこの時期やや目立つようになった。

この頃の河川部では次第に湿地的環境が広がり，ここに初めガマ属やカヤツリグサ科が分布を拡大し，続いてヨシやツルヨシなどのヨシ属が急速に増加し，ヨシ原といった景観を見せるようになった。また一部にはオモダカ属やミズアオイ属などの抽水植物も生育しており，沈水植物のフサモ属がみられるような水域の存在も予想される。

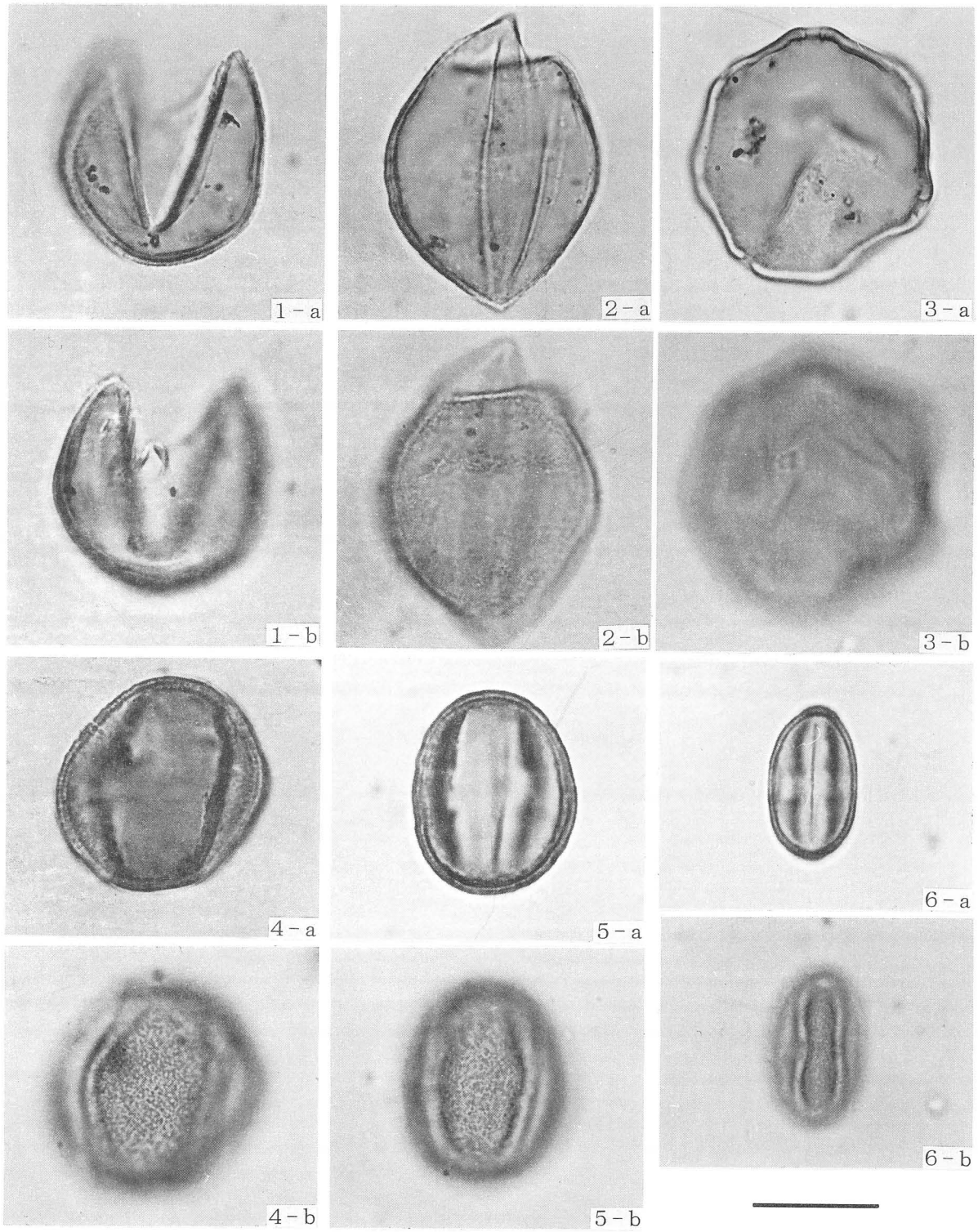
本帯最上部試料においてイネのプラント・オパールが突然と多く検出されるようになり，弥生時代後期と考えられている畦畔遺構も検出されていることなどからこの時期における水田稲作の開始が予想される。河川部では先に記したようにヨシ原が成立していたと考えられ，水田稲作はこのヨシ原を切り開き行われるようになったのであろう。よってヨシ原は急速に縮小し，ヨシ属は水田内や周辺水路などにわずかにみられるのみとなり，カヤツリグサ科も同様である。また抽水植物のオモダカ属，ミズアオイ属や水生シダ植物のミズワラビ属が水田雑草として水田内に生育していたであろう。

弥生時代後期～７世紀：花粉帯Ⅲに当たり，周辺丘陵部では再び照葉樹林がその林分を広げた。これは洪水時代後における土地の安定に起因するものと推測される。一方スギ林やヒノキ類の林は縮小したが緩やかではあるが回復の傾向がみられ，コナラ亜属とともに二次林要素として増加したものと推測される。

この頃の低地部（河川部）では依然として水田稲作が営まれており，水田雑草としてオモダカ属やミズアオイ属に加え，同じ抽水植物のサジオモダカ属や水生シダ植物のサンショウモも生育していた。

引用文献

那須孝悌（1989）活動の舞台：概論．弥生文化の研究１弥生人とその環境，雄山閣出版株式会社，p.119-130.



図版１　東中筋遺跡の花粉化石（scale bar：20μm）

１：スギ　PLC.SS 3024　No. 3

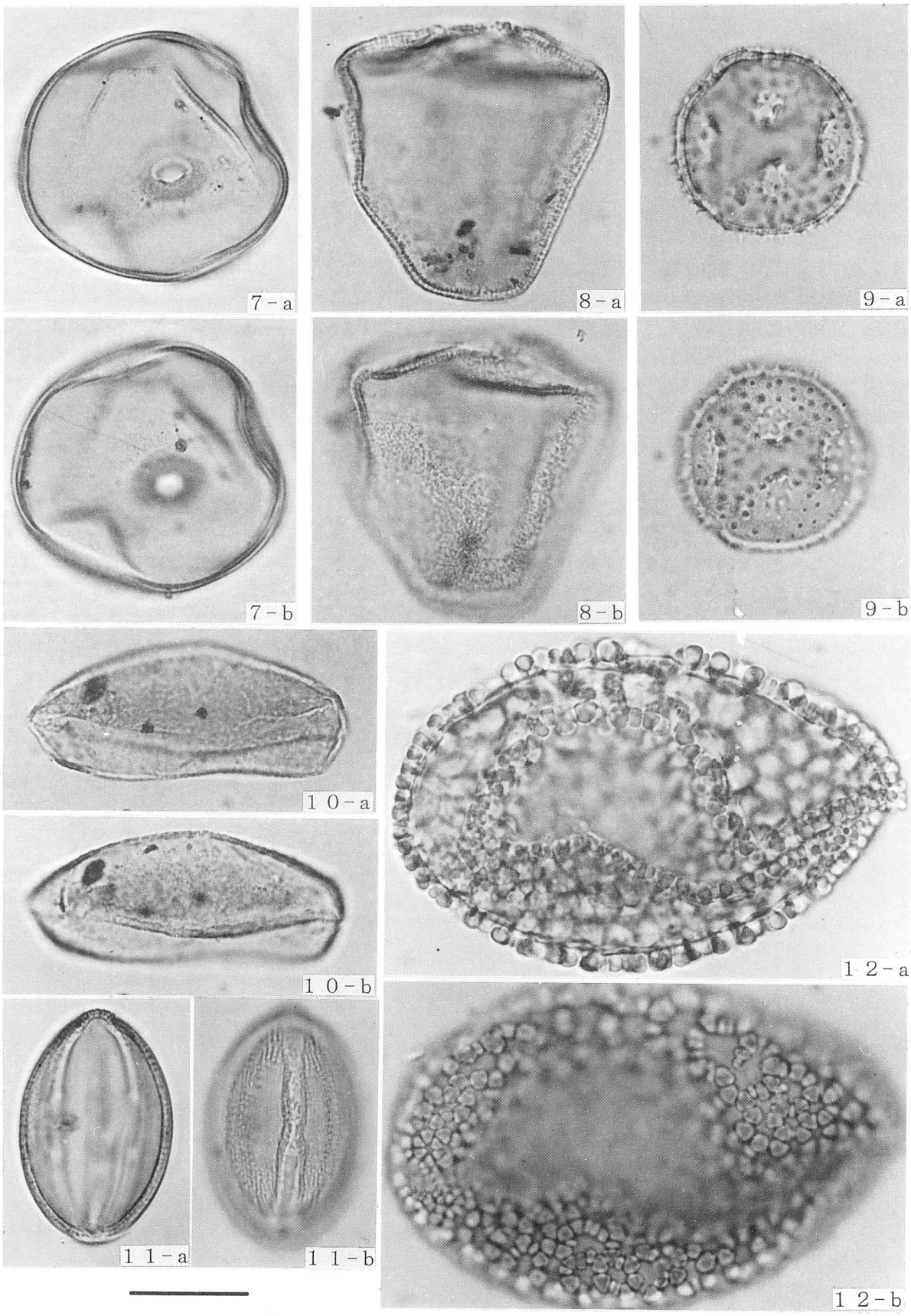
２：イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科　PLC.SS 3027　No. 8

３：クルミ属　PLC.SS 3026　No. 8

４：コナラ属コナラ亜属　PLC.SS 3023　No. 3

５：コナラ属アカガシ亜属　PLC.SS 3022　No. 3

６：シイノキ属－マテバシイ属　PLC.SS 3019　No. 3



図版２　東中筋遺跡の花粉化石（scale bar：20μm）

７：イネ科　PLC.SS 3025　No. 3

８：カヤツリグサ科　PLC.SS 3029　No. 9

９：オモダカ属　PLC.SS 3021　No. 3

１０：ミズアオイ属　PLC.SS 3020　No. 3

１１：ゴキヅル属－アマチャヅル属　PLC.SS 3028　No. 9

１２：ユリ科　PLC.SS 3030　No. 9

第５章　調査のまとめ

第１節　遺構の変遷

東中筋遺跡で検出した遺構を出土した遺物から時期別に分け，それぞれの時期の様相を概観し，遺構の変遷について考えてみる。

Ⅰ期　（縄紋時代晩期～弥生時代前期）

調査区中央で検出したＳＲ１は，河床において縄紋時代晩期～弥生時代前期の土器が出土した。縄紋時代晩期の土器はほとんどローリングを受けていないことから，本遺跡では遺構が確認されていないが，周辺に生活域があると考えられる。同一土層から土器とともに木製農耕具が出土し，現状では水田は確認されていないが，生産域である水田の存在も考えられる。

弥生時代前期の遺構は，４基の土坑と柱穴がある。土坑はＳＲ１の南岸に沿って単独に点在する状態で検出された。土坑は楕円形を呈し，完形ないし完形に近い土器が出土した。土器の時期は前期末のものである。

Ⅱ期　（弥生時代後期～古墳時代）

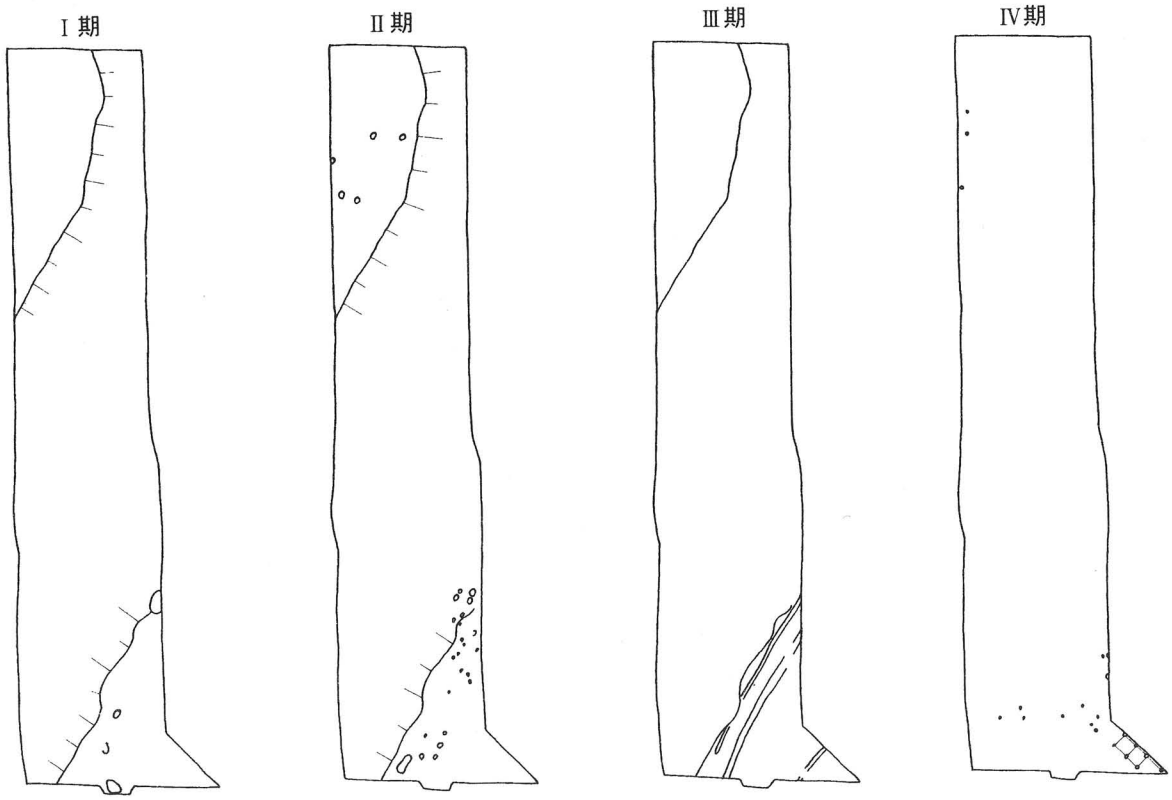
ＳＲ１がほとんど埋没して，わずかな微低地となる時期である。遺構は北西部と南東部に柱穴が検出され，ＳＲ１の南岸の第６・７層より多量の土器が出土した。自然科学分析ではこの時期は洪水や多雨により土地が不安定であったことが判明しており，生活域の中心はより安定した南側の微高地にあると想定できる。土層の観察によれば，第６・７層は土壌層と非土壌層に分けることができ，自然科学分析では第６～８層においてイネのプラント・オパールが多量に検出されていることから水田であると考えられる。

Ⅲ期（古墳時代後期）

ＳＲ１は完全に埋没して平坦地となる。遺構としては，ＳＤ１～３の溝である。ＳＤ１とＳＤ２は平行して延びる溝で，芯芯間の距離は1.75～2.00mである。

Ⅳ期　（江戸時代）

遺構はＳＢ１と柱穴のみである。



第33図　遺　構　変　遷　図（Ｓ：1/800）

第２節　ＳＲ１出土の木製農耕具について

本遺跡では，ＳＲ1の河床直上において平鍬（第30図）と泥除（第31図）の木製農耕具が出土した。同じ土層から出土した土器の時期は縄紋時代晩期～弥生時代前期であることから，この木製農耕具も当該時期のものである。奈良国立文化財研究所編『木器集成図録　近畿原始編』(1993. 3)の分類に基づくと，169は「曲柄平鍬ＣⅡ」，170は「Ｉａ型」である。泥除の171は「泥除Ⅱ式」である。

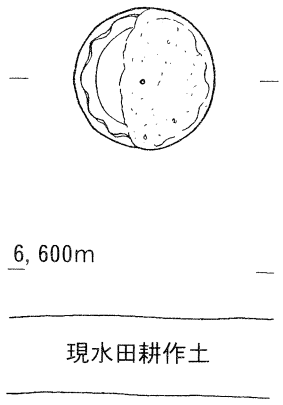
高松平野において，縄紋時代晩期～弥生時代前期の木製農耕具を出土した遺跡は，「林・坊城遺跡」・「さこ・長池遺跡」と本遺跡の３ヶ所である。林・坊城遺跡ではＳＲ01流路Ａ下層から諸手鍬１点，鍬３点，えぶり１点，柄付半截木製品２点，小型鋤状木製品４点，柄３点が出土し，さこ・長池遺跡ではＳＲ02の河床から小型鋤状木製品１点，割材４点が出土した。これら３遺跡の共通点は，旧河道の河床直上からの出土という点である。林・坊城遺跡とさこ・長池遺跡の小型鋤状木製品は同じ形態である。一方，本遺跡は平鍬と泥除の２種類であり，ともに高松平野では初めての出土である。

林・坊城遺跡と本遺跡においては，プラント・オパール分析ではイネのプラント・オパールが検出されているが，水田は確認されていない。その原因として林・坊城遺跡の報告書の中で，①集水域である河川内の堆積物は上流域からの流れ込みなどにより再堆積し，それに伴って遺物や微化石が移動すること，②河川の形成された時代や時期決定が難しいこと，③河川の下層に埋積する縄紋時代晩期とされる黒色粘質土中では土壌学的一般に水田耕作が行われにくいなどが挙げられている。一方，さこ・長池遺跡，さこ・長池Ⅱ遺跡，弘福寺領讃岐国山田郡田図北地区，さこ・松ノ木遺跡では弥生時代前期末以前と考えられる水田が検出されている。これらの水田は形態・規模ともほぼ同一であり，立地環境は埋没自然堤防上・後背湿地である。

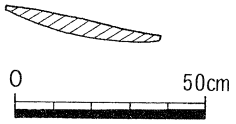
これらの水田が縄紋時代晩期まで遡ることが可能かどうかは，現時点では不明である。しかし，完成された水田形態と木製農耕具の器種構成から考えると，今後高松平野の同様な地形において縄紋時代晩期の水田が検出される可能性が高い。

第３節　焼夷弾について

調査区中央やや北寄りにおいて，ＳＲ１を掘り下げている途中で焼夷弾の一部が出土した。出土したのは弾頭部おもりであり，直径37㎝，厚さ５㎝，重量約30kgを測る。焼夷弾のおもりは現在の地表面から約１ｍの深さまでめり込んでおり，内側の平坦な面を上に向けた状態で出土した。高松市内ではこれまでも焼夷弾は数カ所で見つかっている。この焼夷弾は，昭和20年７月４日の高松空襲の際にＢ29より投下されたものである。



参考文献
奈良国立文化財研究所編　1993　『木器集成図録　近畿原始編』
香川県教育委員会　1993　『林・坊城遺跡』
高松市教育委員会　1993　『さこ・長池遺跡』



第34図　焼夷弾平・断面図（Ｓ：1/20）

報告書抄録

ふりがな	ひがしなかすじいせき
書名	東中筋遺跡　－第１次調査－
副書名	都市計画道路東浜港花ノ宮線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第一冊
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第57集
編集者名	小川　賢・中西　克也
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目８番15号　TEL　087（839）2636
発行年月日	平成13年12月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
東中筋遺跡 （ひがしなかすじいせき）	高松市（たかまつし） 桜町（さくらまち） 二丁目（にちょうめ）	37201		34° 19′ 14″	134° 3′ 14″	H11.11.17 ～ H12.1.31	1,245 m²	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東中筋遺跡	集落	縄紋時代 ～ 弥生時代 古墳時代 江戸時代	土坑 柱穴 旧河道 溝 掘立柱建物 柱穴	縄紋土器 弥生土器 木製品 土師器 須恵器	縄紋時代晩期～弥生時代前期にかけての木製農耕具

都市計画道路東浜港花ノ宮線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書　第一冊

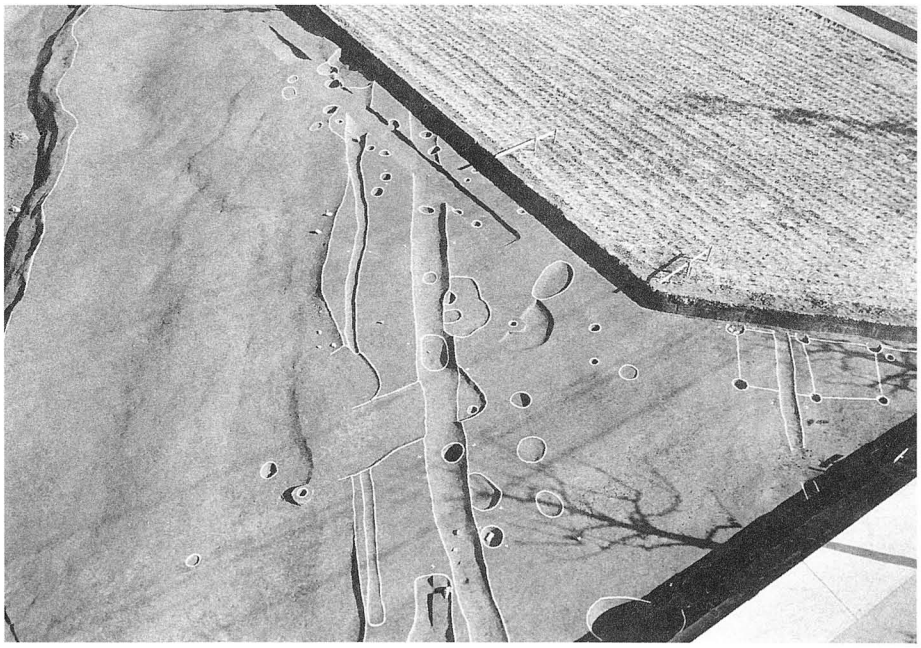
東中筋遺跡
－第１次調査－

２００１年１２月２８日

編集・発行　高松市教育委員会
印　　刷　（有）河端商会

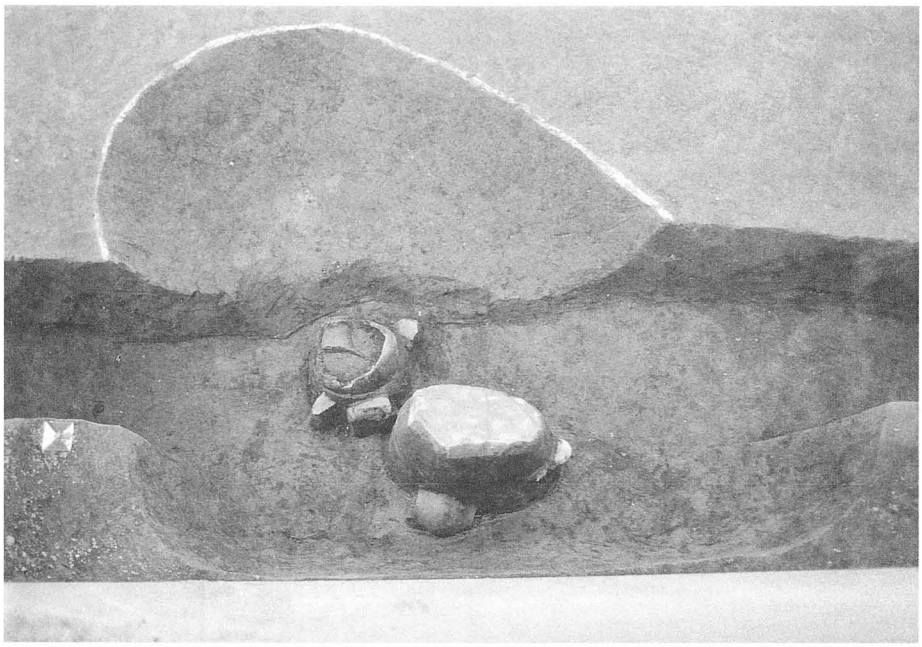
1．空中写真

2．完掘状況（南から）



3．完掘状況（南から）

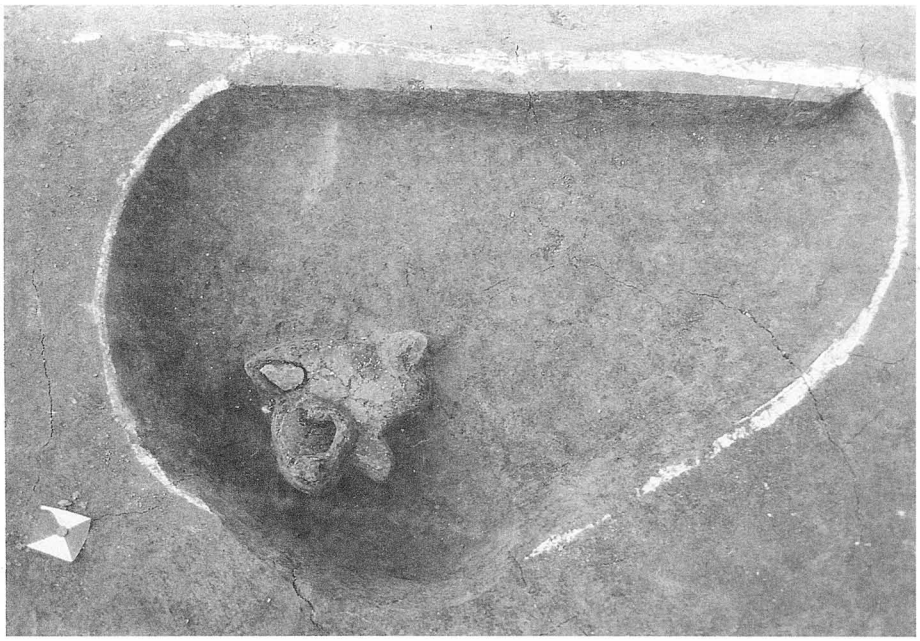
図版2



1． SK1

2． SK1 遺物出土状況

3． SK2



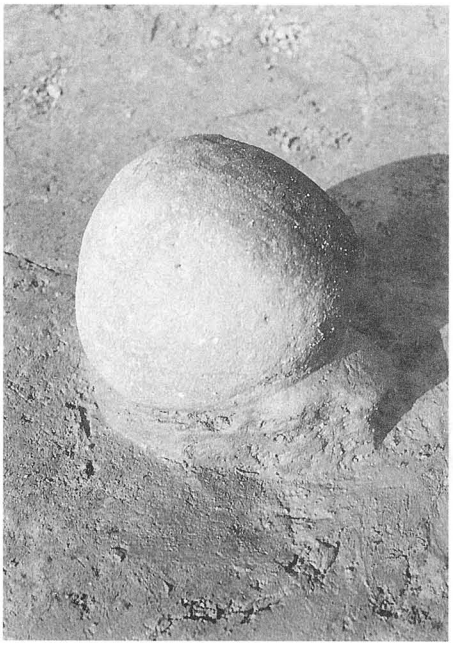
1．SK3

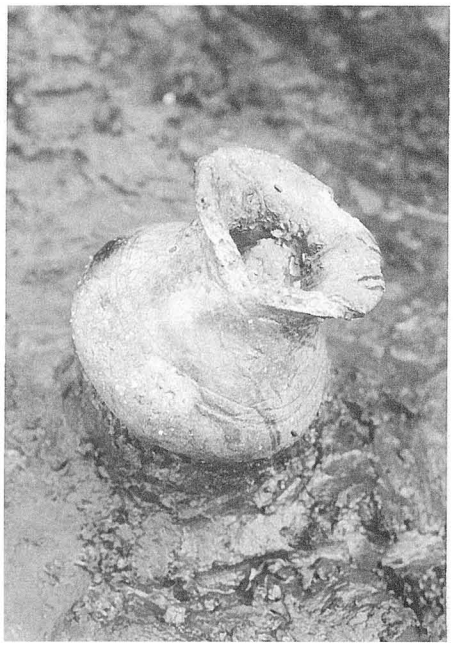
2．SR1

3．SR1

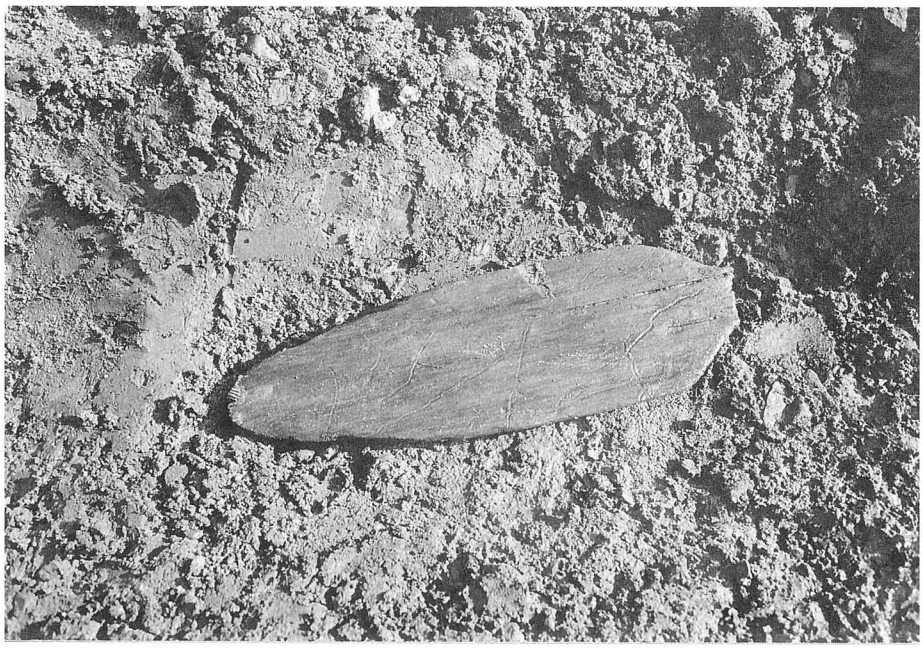
図版4

1． SR1 土層断面

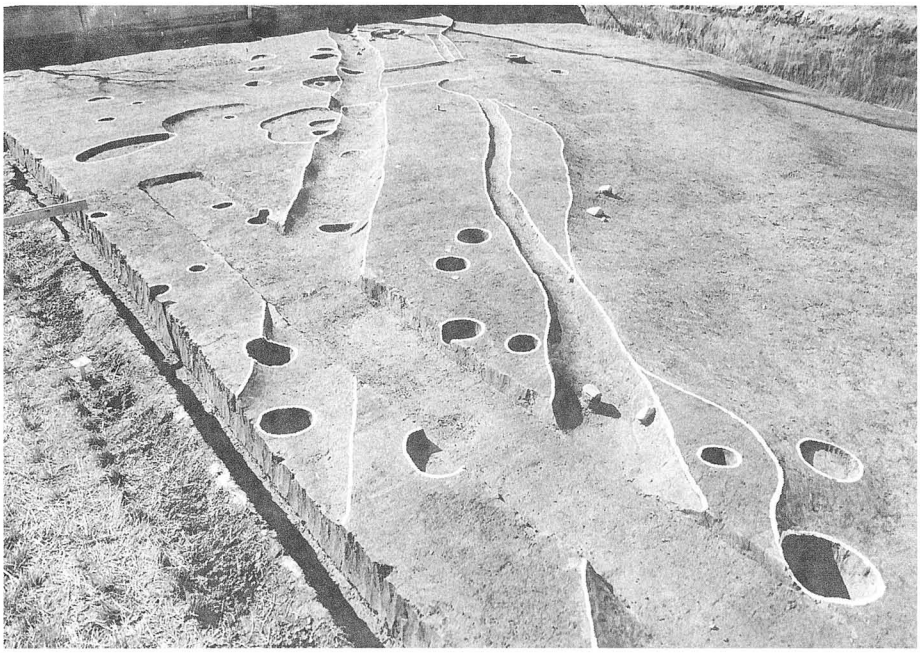




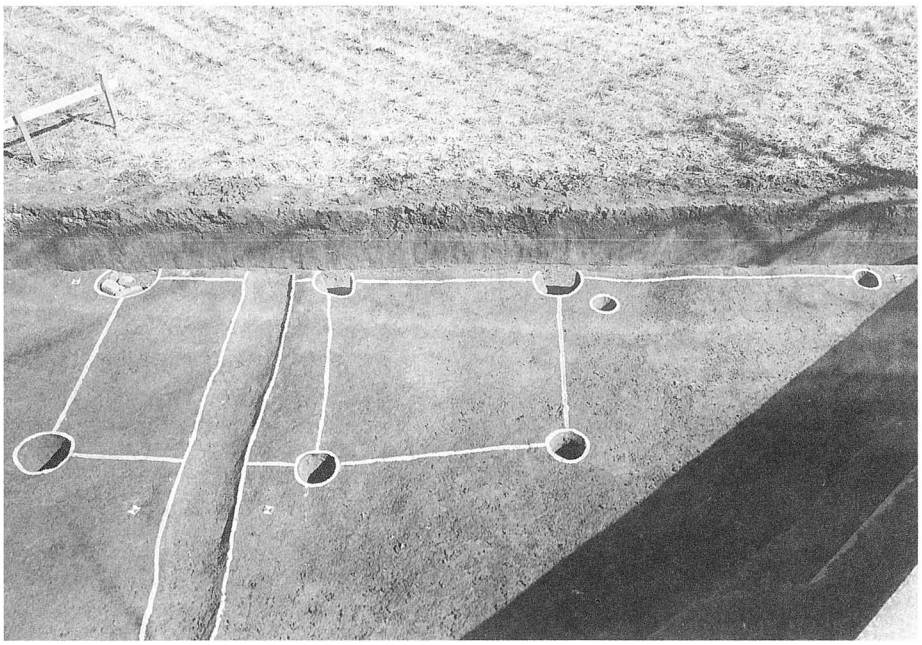
2・3． SR1 遺物出土状況



4． SR1 遺物出土状況



1．SD1・2



2．SB1

3．焼夷弾出土状況

27

115

2

3

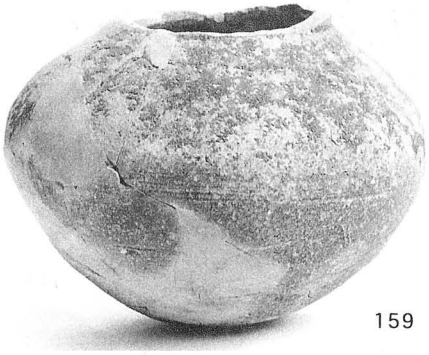
8

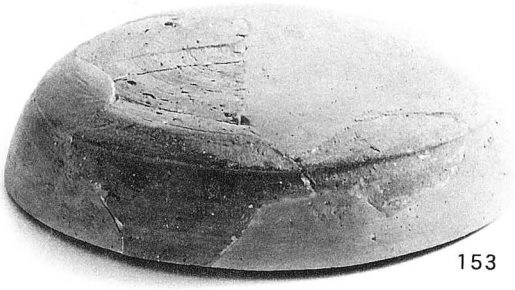
37

16

160

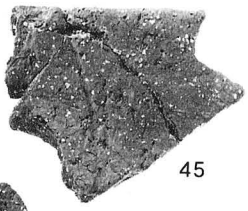
161

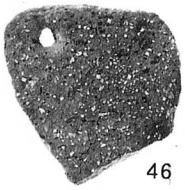

159


153

156

19


45

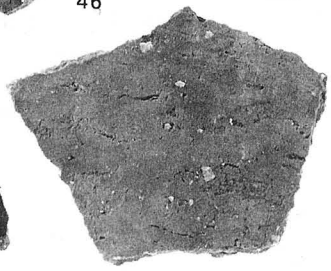

46

22

25

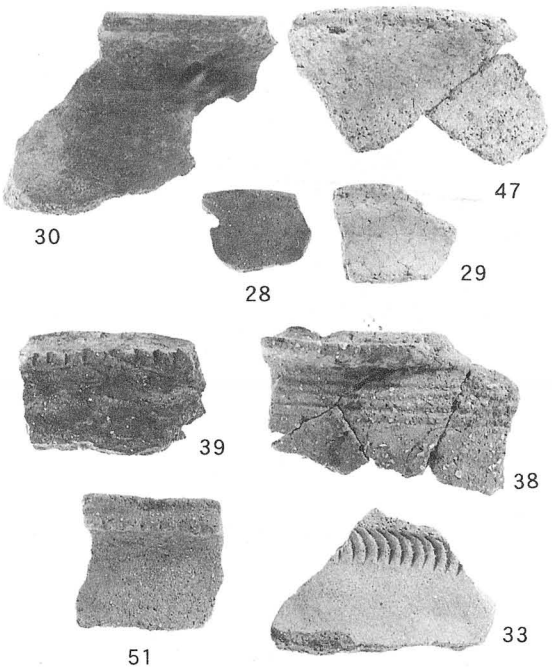
23

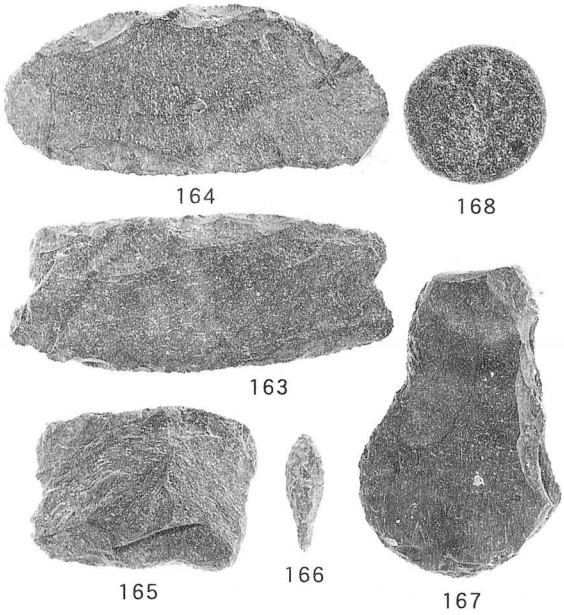
35

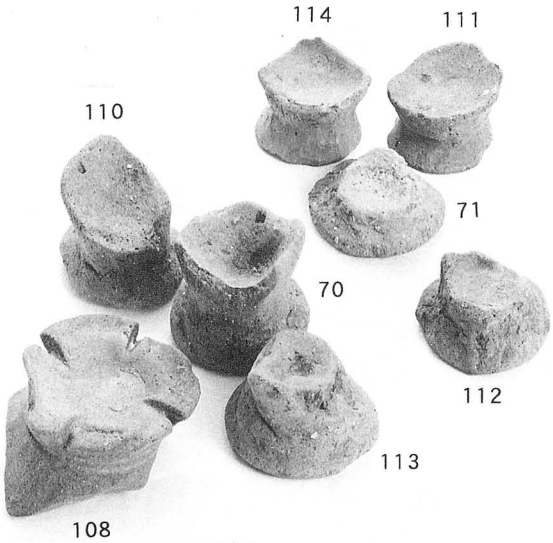

21

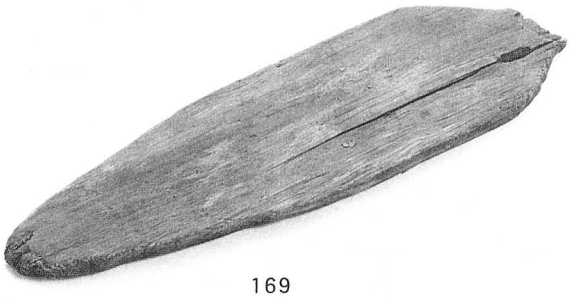
26

24

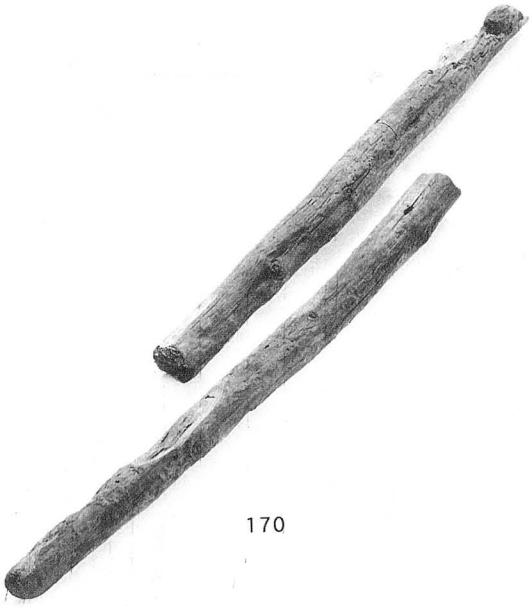

30
47
28
29
39
38
51
33


164
168
163
165
166
167


114
111
110
71
70
112
113
108


169

171


170

附図 1　東中筋遺跡(第1次調査)遺構配置図(S:1/100)

高松市教育委員会